

女子美

No.160/2008



嶋田しづ「奇蹟の邂逅」2007年

- 2P 洋画家 嶋田しづ氏 インタビュー
- 6P 蛸川幸雄氏 特別講義
- 8P 眞田 岳彦教授セタガヤンプロジェクト「庭を編」
- 11P 杉田 敦 准教授著 新刊「ナノ・ソート」紹介
- 12P 女子美スタイル☆最前線 ギャラリートーク
- 14P 2007年度 卒業（修了）制作展
- 17P クローズアップ◎ 欧文タイポグラフィ研究会
- 18P 海外スプリングスクール報告 他
- 19P えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト 他
- 20P 学生のボランティア・社会貢献及び学外展覧会支援 他
- 21P 「バリの交差点」新津 亜土華さん
- 22P 訃報 日本画家片岡球子氏 逝去
- 23P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 24P 2008年度 新任専任教員紹介・退職教員からのメッセージ
- 25P 新入生のみなさんへ
- 26P 公募展受賞者紹介・シリーズ 女子美探訪⑨

女子美術大学広報誌

第15回井上靖文化賞受賞 洋画家／女子美術大学名誉博士 嶋田しづ氏 インタビュー



昭和17（1942）年に本学を卒業された画家の嶋田しづ氏は、20年にわたり、パリを拠点として制作活動を続け、高い評価を受けました。平成19（2007）年、西洋と東洋の絵画を融合した独自の絵画制作活動が認められ、第15回井上靖文化賞を受賞しました。この度、本学の名誉博士号を授与された記念に、インタビューをさせていただきます。

「漂えども沈まず」という言葉を座右の銘とする嶋田先生は、「本当に自分のやろうとしていることは、仕事をしないとわからない。仕事を続けない限り、自分らしさというもののは出てこない」という言葉で、われわれに仕事を続けることの大切さを教えてくださいました。先生の女子美時代から今日までの軌跡をご紹介します。

個性豊かな仲間にもまれた好奇心旺盛な女子美時代

私は昭和14年（1939年）に女子美術専門学校師範科西洋画部に入学し、昭和17年（1942年）の秋に卒業しました。戦争が始まったので、半年繰り上げての卒業式になりました。

当時、師範科の指導は、美術教師になる人材を育てるということで、とても厳しいものでした。学生たちは、それはそれは個性の強い女性たちばかりで、とてもおもしろかったです。とにかく、女性が働くなんてもってのほかの時代に、よりによって芸術を志すのですから、大ブルジョアのお嬢様たちばかりで、見事なまでに全員生意気でした。朝鮮（韓国？）や台湾の王族貴族の令嬢や日本の名家の人たちで、戦争を前にした当時の社会状況を考えると、よくぞ集まったというメンバーでした。私は樺太の女学校を卒業して入学したので、最初

のうちには、自分は田舎者だと思っておとなしくしていました。でも、だんだん馴染んできて、卒業の頃には成績も認められて自信を持てるようになりました。

私が入学できたのは、樺太の女学校の先生が、ぜひ絵の道に進んだほうが良いということを両親に掛け合ってくださいました。親もあきらめたのか、この子には好きなことをさせておいたほうが良いと考えて、進学することができました。クラスは14名くらいでしたが、足助先生が油絵の主任の先生で、田中市松先生、沢柳大五郎先生。沢柳先生は、美男子で大モテにモテて、戦争中のひどい時でしたが、みんなで騒いでいました。

女子美では当時、ブルーズという白いガウンを着て制作をしていました。今の東高円寺にあった校舎で、新宿までチンチン電車という都電が走っていました。ブルーズ姿で電車に乗って、新宿の中村屋や高野パーラーに仲間と行ったり、鍋屋横町や宮園町をうろうろしていました。みんな本当に絵が好きでしたので、いつも展覧会に通って、互いにいろいろな情報交換をしました。今から思うと、都会人で、ませていましたね。なかには、花嫁修業をしてから、どうしても絵を学びたいということで入学する人もいたので、年上の人も多かったです。私は一番若かったので、話題についていっただけで一生懸命でした。その頃は、絵の道で生きるとか、仕事をするということ

は考えていませんでした。将来の仕事のことを考えたのは戦後のことです。

私は、美術と同じくらい文学や哲学も好きでしたので、夏休みにはロシア文学の重厚な作品を読破したりしていました。シャンソンも好きで、親に内緒でお店に“つけ”をしてレコードを手に入れて聴いているような学生でした。そういう好奇心もあって、もっと自分の幅を広くしたかったので、女子美卒業後、早稲田大学の史学科に進学したのです。

東洋美術史を学んだ後、「私はやはり絵の道だ」と決意

早稲田大学では、會津八一先生に師事しました。天平・白鳳時代の天竺や唐から渡来した東洋の美術を学ぶために、奈良の薬師寺に泊まり込んで勉強をしました。會津先生は薬師寺の管長だった橋本凝胤さんと親しかったので、我々に美術を学ぶ機会をくださったのです。後に管長を継いだ高田好胤さんと一緒にながーい廊下を雑巾がけしたことも良い思い出です。

戦時中は、戦火が厳しくなる中、多くの仲間とともに美術史を学びました。議論をしながら防空壕に駆け込んだこともあり。学徒出陣で、男子学生は出兵してしまい、ほとんど全員が戻って来ませんでした。會津先生が生涯をかけて集められた書籍や美術品も空襲で焼失してしまいました。私は女性だったために、たまたま生き残るこ



S'effacer et revenir - rumeur subtile I | 去り又来る—かすかなるどよめき | アクリル110.0×145.0 2007



佐野学長と(ご自宅にて)

とができたのです。戦争が終わってから、「私はやはり絵の道だ」と決意しました。絵の道で、仲間たちの分までがんばって、それを通して何らかのつぐないができるのではないかと、胸の内に誓ったのです。

昭和28(1953)年位から、個展を開く事ができるようになりました。昭和30(1955)年にはフォルム画廊での個展、昭和32(1957)年には第一回安井賞の候補にもしていただきました。画家としての活動は順風満帆で、売れっ子になって雑誌の表紙やデザインの仕事なども舞い込んでくるなど、何の不足があるかという状況でした。そういう流れの中にいたのですが、周りの方のアドバイスもあり、自分自身の中で、パリに行って学んできたほうが良いのではないかという思いが湧き出てきたのです。このまま日本の美術界で、コミッティ(選考委員)のような名誉ある立場になって自分の築かれた道を守るか、世界で自分を試すか、という選択を迫られたのです。そして、こんなにちやほやされていていいのかな、という不安と、世界はどうなっているのかという好奇心があって、国費留学の試験を受けました。無事合格して、昭和33(1958)年10月にフランスへ向かう船に乗りました。家族には1年の予定と言いましたが、心の中では、何かを掴むまで戻らないという決意がありました。1年だけではものにならないだろうと考えて、パリに残って絵を描くための準備を内緒で進めました。今まで仕事をして得たお金をすべてドルに変え、出版社と交渉して、パリの特派記者としてフランスの文化についての記事や、美術やデザインの情報を日本に送る約束を取り付けたりしたのです。相当たくましかったですね。

版画を学び、パリのトップクラスのサロンをめざす

最初の半年はモンパルナスに住んでいました。日本人の留学生や絵描きも集まっています、楽しかったのですが、このままでは駄目だと感じて、ひとりでエッフェル塔の

近くの15区のスタジオ、スタジオに引っ越しました。当時アトリエと生活空間が一緒になったワンルームのスタジオに行く人はいなかったので、ずいぶん珍しがられました。

パリにはサロン・ド・メという招待出品のサロンがありました。その当時、そこに選出されると世界中の画廊で通用すると言われたサロンです。そのコミッティのメンバーは世界のそうそうたる人しかいませんでした。パリの中でも、そういうトップクラスの人たちの中に入って学ばなければ意味がないと考えたのです。そのためにはいい仕事をしてみせて、彼らを唸らせなければならぬと思いました。それからというもの、がんばりました。数年後にはそのメンバーの仲間入りをする事ができたのです。

戦後間もない時期、私自身、多くの学友を戦争で失ったことを胸に秘めてパリに向かいました。彼らの分までがんばろうという思いがあったので、絶対に作品を認めてもらうまで、日本には帰らないと決意していました。

パリでは、版画も学びました。一流の作家たちはみな、版画作品も制作していました。版画をつくることは、作家としてあたりまえのことでした。洋画は洋画、版画は版画と分けているのは日本だけです。パリでそんなことを言っていたら、笑われてしまいます。でも、その作家らしい版画をつくらなければならないので厳しかったです。版画については、いろいろな学校に2年くらい通って勉強しました。

パリではそう簡単に展覧会に出品することはできなかったのですが、2年くらいはガリガリ仕事して、恥ずかしくない作品をつくることに必死でした。そして、やっとアンデパンダン展に出品することができるようになり、少しずつ認められました。サロン・ド・メ、サロン・ドートヌ、コンパレゾン展とか、世界の女流画家を集めた展覧会など、1年に2、3回大きな展覧会があり、その他に招待作品と個展用の作品を制作しました。一度でも変な作品を発表したら、次回から二度と招待されなくなるので気を抜けなかったです。ブリュッセルやリュクサンブールでも個展をやりました。リュクサンブールの王室に作品を買っていただいたこともあります。パリ時代は、とにかく毎晩夜中まで仕事をしていました。だから日本にコンタクトする時間もなく、日本に帰って作品を発表する時間もあまりないまま、あっという間に20年が過ぎたのです。

絵そのものを評価して欲しいと願い、無国籍ファッションで活動

初めは日本人だから面白いという評価は受けたくなかったので、無国籍のファッションをして活動していました。私がつくりあげた絵そのものを評価して欲しかったのです。当時、パリの人は藤田嗣治のことは日本人として有名で知っていても、日本がどこにあるかも知らず、興味もないような時代でした。私はいつも中折れ帽に、インディアンの子のようなエスニックなブルゾンの上着とズボン姿で、全財産が入った皮のバッグを斜めがけにしましたが、唯一の一度も盗難にあった事はありませんでした。それは、愉快な事でした。みんな、インディオかなと思っていました。フランス人の3倍以上働いて、それなりに評価も受けましたが、だれからも国籍を問われたことがなかったのです。周りには全く日本人がいなかったので、一言も日本語を話すこともありません。もちろん日本で絵描きとして評価を受けていたという実績も誰にも言いませんでした。色眼鏡で見られなくなかったし、はだかで勝負したかったのです。ですから、みんな無名の女の子が、パリで成功したんだと思っていました。

5~6年経って、アール・ピバンでパロン・ルノアールの招待展に参加をした時、日本から関口俊吾さんがいらして、私がジャポネだということがみんなにわかって、ずいぶん驚かれました。パロンは随分、私のことを可愛がってくださり、よく招待展に誘ってくれました。それでも、私の国籍など全く知らずともしませんでした。フランス語はあまりできなかったのですが、絵を描く分には、困りませんでしたから、作品で多くの人たちとつながることができたのです。そのつきあいは、今日まで、まだ続いています。

20年間、誰にも言いませんでしたが、日本を背負っているという意識でした。パリで仕事をしている間は、礼儀正しくし、約束は必ず守り、一度も人を裏切るようなことはしませんでした。結果的に絵だけでな



井上靖文化賞授賞式にて

Interview

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN



Arc du cercle - courir a 弧球にて一駆ける・a
油彩 258.8×193.3 1989

くて、人間的にも十分認めてもらえたことが嬉しかったです。ですから、パリでいやな思いは一度もしたことはありませんでした。

芸術は技術だけでなく、人間的な教養が大切

ずっと絵で勝負したいと思っていましたが、絵だけでは、そんなに成功できないというのが実感です。いい作家は絵だけではなくて、哲学も音楽も文学もふるまいも、一流中の一流だと感じました。芸術家は技術だけでなく、人間的な教養がとても大切なんだということをパリでの活動を通じて感じました。人間性の問題が問われるのです。凜とした態度で生きなければならないということです。私がおそのことに気づいて、

20年間パリでやってこれたのは、會津八一先生からの教えによるところが大変大きかったと思います。

先生は、「深くこの生を愛しなさい」ということをおっしゃっていました。それは、自分を愛さなければならないということです。愛することによって生きていくことができるのです。「かえりみて、“己”を知らなければならない」という、自分はどうかあんなばならないのか、自分はどのような性質なのか、考えていかなければならないということをお我々に示されました。私が一番好きな言葉は、「学芸をもって“性”を高める」というものです。学芸を学ぶことを通して、自分の性質を高めていくことができる、というこの言葉が若いときから一番好きでした。人間は、仕事をするによって自分の精神を高めていかなければなりません。「日々面目を新たにすること」も大切です。昨日より今日、今日より明日。今日は落ち込んで、明日は素晴らしい人に見えるかもしれない。明日は今日よりも良くなると思うと、元気が出ますよね。素晴らしい人に出会うと、それによって自分の画業も磨かれます。絵の部分だけ努力しても、素晴らしい絵描きにはなれません。一般の人が一目見て、心を打たれて、なごむことができるような作品や、今の時代を象徴するような作品をつくることは、技術だけではできないことです。

パリの黄金期を体感し、多くのことを学んだ20年

パリでは、いくら性質が良い人でも、絵



名誉博士号と大学より作品寄贈における感謝状を授与(ご自宅にて)
(左から 小倉芸術学部長、嶋田先生、佐野学長、木下短大部長)

が悪い人とは絶対に付き合う事はできません。それが原則です。だから、グループがくっきり分かれていました。

売る絵を描く人、お土産用の絵を描く人、賞をもらいたい人。パリは一般の人でも技術だけでは認めない。それは素晴らしいほど厳しい評価にさらされます。いくら口先だけで言ってもだめです。子どもの時から美術館に通って目がこえているし、親からの教育も厳しい。育っている環境で、見る目が違うのです。だからどんなに理屈で説明してもだめで、4、5点見るとすぐわかってしまう。良くない作品に対しては、最敬礼しながら、距離を置いて離れて行ってもらうわけです。そういうことが、すごく勉強になりました。その意味では冷たい社会ですね。

私がパリで活動した1958年から1978年は本当に良い時代でした。本当に素晴らしい絵描きが活躍していました。エディット・ピアフ、イブ・モンタンが毎晩のように歌っていて、街に活気がありました。夜中にジャコメッティがクーポールというレストランで2時3時まで考えごとをしている姿を見たり、ポー・ボワールやサガンが新しい文学をつくっていました。エネルギーが満ちあふれていて、最高の時でした。それが過ぎると、アメリカのポップ・アート美術が台頭してきました。アメリカは、伝統的なヨーロッパ絵画に対して、挑戦したいという思いがあったと思います。パリの人はショックを受けて、1年くらい絵を描くことをやめざるを得ないほどの、大きな痛手をうけたのです。そのショックを受けて仕事をできなかったという事が、あの人たちのすごいところ。日本だったら仕事なんですから、ショックもなにもないですよ。それから2年くらい経ってから作家達もようやく復帰してきました。私自身にとっても大きなショッキングな出来事でしたから、その前後は絵の雰囲気が変わりましたね。



Amitié - Lien de l'amour Amitié - 愛のきずな 油彩 181.8×227.3 2006



Vue lointaine de la porte 展望P
油彩 130.0×162.0 1972

仕事を続けられない限り、自分らしさというものは出てこないのです

日本に戻って、今までパリで制作してきたものの続きをやろうと思い、個展やグループ展に集中して活動をしてきました。日本では名前が知られていなかったのですが、また1からのスタートでしたが、それでいいと思いました。仕事を通して、次の世代の人にこういう作家がいることを伝えていきたいと考えました。私がパリで受けた一番の財産は「漂えど沈まず」という生きる姿勢です。これからも仕事を通じて、伝えていきたいと思っています。

若い学生さんたちには、まず仕事をしなさい！と言いたいですね。いろんな本を見てまねてもだめです。まず、自分を磨いて謙虚にならなければなりません。本当に自分のやろうとしていることは、仕事をしないと出てこないのです。仕事を続けられない限り、自分らしさというものは出てこない。

私は、25歳の時に、絵描きになると決意して、その時、絶対、40、50歳で有名になろうとかいう馬鹿な考えは起こさないぞ！と決めていました。一番の働き盛りには、できるだけ栄養をとろうと思ったのです。人が何と言おうと自分らしさをつくら



Fleur de la fontaine ファンテーヌの華
油彩 130.5×97.5 2006

なければなりません。人生にはいろんな出来事やリズムがあって、それに共鳴できるならやってもいいけれど、世間事できられるようなことだけは絶対ないようにしようと思っていました。くたびれないように、のびのびと精神的な栄養を摂ろうと考えていました。日本の場合は、偉くなる絵が小さくなる傾向があると感じていたので、そういう作家にはなりたくなかった。60、70歳になっても、絶対いい絵を描き続けるんだと決めていました。晩年に成果をあげるためにどう生きるべきか、そういう哲学的な人生観について、仲間と語り合っていました。

今、振り返ってみて、自分が80歳を過ぎて、今でも仕事ができるということは、若いときのそういう決心があったからじゃないかなと思います。ですから、女子美の若い方たちにも、生きていく姿勢とかものの考え方がいかに大切かということを伝えたいですね。

今までやってきたことを昇華した作品づくりを

パリ時代、私は絵を描いていれば幸せで、ブランド品の買い物などには一切興味がなく、質素に生きてきました。旅行は好きで、10日くらい、中世の風情を残す古い小さな都市など、フローランス、ノルマンディ、ブルゴーニュに行ったりしましたが、買い物に時間やお金を費やしたことは一度もないです。パリのモードといっても、絵を描くのに適した服があればいいという感じでした。私は、精神をいかに豊かに若々くさせるかが大切だと思っています。いい友人、いい先輩たちと交流すること。そして、大自然と触れ合って、自然から感じるものを養うことが重要です。パリの人々にとっては、一番の贅沢は旅行です。家族揃って車に乗り込んで、いろいろな自然や景色の中を訪ね、その土地の人たちと触れ合って、都会の汚れを洗い去ることが幸せなのです。

パリの人たちはみんなシックで、そんなにおしゃれはしないけど、それぞれ個性的で素敵です。日本もこのままではいけないと思います。アメリカナイズされて、便利さは素晴らしいけれど、それだけでは十分でない部分があります。それを若い人たちに考えていって欲しいですね。

帰国後、井上靖先生の『天平の甍』を読んで、非常に感銘を受けました。主人公たちが向学を持ち、文化に憧れて、大陸に渡り、孤独の中で苦労しながら、それ

を乗り越えていきます。本を読んだ時に、そういう精神が、まさに私自身がパリに渡ったときに感じた感慨と同じだと、心から感動しました。先日、その井上靖先生の『第15回井上靖文化賞』をいただくことができ、本当に嬉しい限りです。受賞理由として、東洋と西洋を融合した独自の絵画を制作している、というお言葉をいただきました。これまで、私がかつこつと地味にやってきたことを、絵という領域を超えて文化という大きな役割として褒めていただいたことに何より感謝したいと思います。

私は、これからも、今までやったことが昇華されて、自己の人生体験が作品に出ると思うのです。マチスの晩年の作品を尊敬し、素晴らしいと思います。自分自身の今後の作品がどうなるかを楽しみに、制作活動に励んでいきたいと感じている次第です。

■井上靖文化賞について

小説家・詩人である井上靖氏(1907~1991)の業績と遺志を後世に伝えるために、井上靖記念文化財団が賞を設け、毎年文学や芸術などの分野において顕彰しています。同財団は海外で日本文化の研究を行う人への支援も行っています。過去の受賞者には、小澤征爾氏、ドナルド・キーン氏、陳舜臣氏、白土吾夫氏と日中文化交流協会、梅原猛氏、大野晋氏、白川静氏、安田侃氏、本間一夫氏と社会福祉法人日本点字図書館、直木孝次郎氏、中村稔氏、志村ふくみ氏らが名を連ねています。嶋田しづ先生は第15回の受賞者となります。



嶋田しづ(しまだしづ)

1939年 眞岡高等女学校卒業(禅太)
1942年 女子美術専門学校 師範科西洋画部卒業
1945年 早稲田大学文学部美術史料東洋美術史専攻修了

本学卒業後、早稲田大学文学部で東洋美術史を会津八一氏に師事する。

1958年に渡仏し、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールで絵画、アカデミー・ランソンとヘイターのアトリエ17でエッチング、アカデミー・フリードランデルでリトグラフを学ぶ。以降20年、アンデパンダン展をはじめ、サロン・ドートンヌ、サロン・ド・メ、コンパレゾン展など数々の展覧会に出品し、個展・グループ展などで多数作品を発表。

1978年帰国後も国内外への招待出品、個展開催など作家活動を積極的に展開している。

(主な受賞歴)

1955年 二紀会 新人賞
1956年 二紀会 同人賞
1957年 二紀会 最優秀賞
1971年 第3回国際フェスティバル絵画展民族賞(フランス)

2007年 第15回井上靖文化賞

(主な収蔵美術館等)

茨城県立近代美術館、MOA美術館、大川美術館、原美術館、神奈川県立近代美術館、国立国際美術館、女子美術大学美術館、草月美術館、高岡市美術館、高松市美術館、彫刻の森美術館、テルアビブ美術館(イスラエル)、東京国立近代美術館、富山県立近代美術館、新潟市美術館、葦崎大村美術館、平塚市美術館、ベザレル国立美術館(イスラエル)、横須賀美術館、横浜美術館、ラホヤ近代美術館(アメリカ)、国立ルクセンブルグ美術館(ルクセンブルグ)、神奈川県庁、他多数

Lecture ● ● ● ファッション造形学科客員教授 **蛭川幸雄氏 特別講義**

年間多くの舞台を演出されている本学客員教授 蛭川幸雄氏。俳優として活動をした後に、演出家として歩まれ、アンダーグラウンドの劇団からそのキャリアをスタートさせました。大劇場の商業演劇から、オペラの演出、テレビや映画などさまざまな演出を手掛けてきました。海外でも、シェイクスピアやギリシャ悲劇の名作を数多く成功させて高い評価を得ています。

小劇場から海外公演まで、幅広く経験してきた

私がどういう演出家かということをお話してみたいと思います。私はみなさんにお話したいと思っています。私は昔俳優をやっていたのですが、役者としての才能がないと気づいて、自分で演出家になろうと決意しました。今の新宿伊勢丹の隣に、真っ黒い建物でアルトシアターというところがありました。入り口には岡本太郎さんの「座ることを拒否する椅子」というオブジェが置いてありました。アンダーグラウンドの劇団や過激な映画人が集まっています。夜九時過ぎて映画が終わると、演劇の小劇場になったのです。そこに企画を持って売り込みに行きました。土方巽さんとか寺山修司さん達によるいろいろな作品が上演されていました。蟹江敬三、石橋蓮司、萩原健一たちと一緒に劇団をつくり、1969年に演出家としての初舞台をつくりました。アンダーグラウンドの演劇活動を一生懸命やってきました。

やがて商業演劇を始めて、松本幸四郎さんが染五郎だった時、日生劇場で『ロミオとジュリエット』の演出を行いました。大きなところでやったものですから、小劇場の仲間からは裏切り者と言われました。その後、唐十郎さんから電話があって、一緒に芝居をやらぬかと誘ってもらいました。私は評判が悪かったので、大丈夫かと聞いたら、才能があればそんな気にする必要はないよ、と言ってくれましたね。沢田研二



「天保12年のシェイクスピア」 2005年公演 シアターコクーン 撮影：谷古宇 正彦

の『唐版・滝の白糸』という芝居を大映の撮影所でやりました。そういう風にさまざまな活動をしていたのですが、ある年の舞台の評判が悪くて、批評家の年間ワーストワンになってしまったのです。お客の入りはまあ良かったのですが、これでは、日本で仕事をしていてもダメだと思いました。自分では悪いと思っていないので、外国で試してみようと思ったのです。

最初にイタリアに行きました。ローマのボルゲーゼ公園の野外ステージで『王女メディア』を上演したら非常に評判が良かったです。スタンディングオベーションになったのです。次にギリシャに行きました。市内に古代劇場があるのですが、そこではやらせてもらえず、外れの劇場で上演しました。後に留学中の村上春樹さんが見に来てくれたと聞きました。その公演の評判が良く、翌日の新聞で、なぜ古代劇場でやらないのかと聞いてくれて、翌年もう一度、古代劇場でやったのです。ヨーロッパで仕事することの面白さは何かというと、良ければ待遇がどんどん変わっていく。ホテルが相部屋から1人一部屋になる。荷物も運んでくれる。食費も4000円くらいだったのが7000円くらいになる、評価が数値にはっきり出るのです。

自分が正しいと思ったことを貫きとおす

そうやって、日本では評価されないけど、外国で評価されたのです。それが一概にいいとは限らないけど、みなさんもこれから

そういうことがあると思うけど、どんなに評価されなくても、自分が正しいと思ったら、貫き通したほうがいいと思います。そのために、私は、自分の作品がどの程度の仕上がりなのか、自分で初日に評価、分析して、引き算しておくのです。周りにどんな評価をされても、その自分の評価が核にあればいいんです。批評家なんていい加減ですから、その人の恣意的な判断によって、いい時もあれば、悪い時もある。そんなこと、いちいち気にしていたら、自分の作品のいいところが無くなってしまいます。実際、私は批評に對抗しようと思って、「蛭川新聞」というのを自分で発行して会場で配りました。そういうことをして、自分ひとりでも戦ってきたのです。

今、映画の準備をしています。『蛇にピアス』という芥川賞作品。実は、私は芝居はあんまり見るのは好きじゃなくて、映像で勉強していたのです。演劇をやっていると、どうしても本物の装置が少ないので現実の風景を使ったり、顔の傍で語ったり、そういうなまなましい生的なもの撮りたかったのです。あとは、蛭川実花の監督作品『さくらん』が面白かったので、娘に負けたくない、という気持ちもあります。

メディアでは、私は怒ってばかりいるような演出家になっていますね。テレビの取材は、何時間も私に張り付いているのですが、一番ドラマチックなところを撮りたがるのです。それが役者に駄目出しをしているところや、怒っているところだけをつないで発表するので、そういうイメージが

ついてしまう。そんな演出家には、誰もついてこないですよ。私だって、疲れてひっくり返っている時もあるし、笑うんですからね。どうぞ虚像には惑わされないください。今は実像です。ちょっと恥ずかしいから話す言葉が速いかもしれません。

プロフェッショナルな質を高める外国のシステム

外国の俳優たちとやる稽古と、日本の俳優たちとやる稽古は違いますね。外国の稽古は、2時間なら必ず2時間で終わらせなければならぬ。もし稽古が夜の6時を過ぎたらオーバーギャラを払う。契約社会なのです。どんな稽古の場面でも、2時間経ったらハイ休憩、そういう風にはっきりしている。関係者以外の人は絶対に稽古場に立ち入ってはいけないなど、俳優のプレッシャーを取り除くために非常に厳しくやっています。オーディションも同様です。オーディションには有名な俳優がぞくぞくきますが、その俳優同士が会うことはない、誰が受けたかわからないようになっているのです。リハーサル料というのもあります。リハーサルをするためのお金が積み立てられない限り、稽古に入れないのです。そういう風に、俳優やつくる人達の権利がきちっと守られています。

外国では、ビジネスライクであり、システムもまったく日本と違います。だから経済的にはすごく厳しいのです。舞台美術でもベニヤ板が何枚必要で、発注したら必ず全部使って欲しいと言われる。無駄を許さない。日本はもうちょっとおおらかですね。私なんか、一度つくった舞台装置を変更したりすることあるんですけど、外国ではそんなこと、もう99%許されない。

役者も必ずダブルキャストになっていて、代役の人がいます。出来の悪い人はどんどん降ろします。ある時、初日の一週間くらい前に1人出来の悪い役者がいて、プロデューサーに相談して降ろすことになりました。プロダクションに電話して、本人に話して、3分後には一切稽古をさせなかったですね。別の代役が繰り上がって、何の支障もなく1時間後に稽古が再開しました。

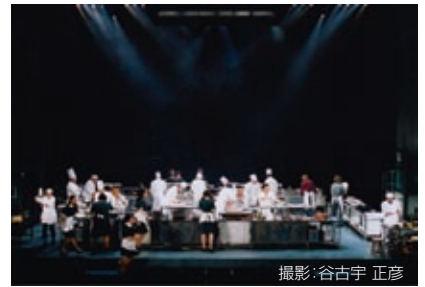


代役の人達は、わからないところでちゃんと稽古を積んでいたのです。日本よりもはるかに合理的なシステムができています。それがイギリスの俳優たちのプロフェッショナルな質を高めます。責任感のある優秀な人間たちがどんどん集まります。競争原理を発揮していますから、透明性があります。それが日本とは全然違う点だと思います。大変ですが、それでもみんな頑張っているのです。

演出は人間の原点のような仕事

私の舞台の衣装は、3人の衣装デザイナーがいて、作品に応じて指名している。3人とも女性なのですが、選ばれた人は、それぞれが自分の下の人を選んで、何人がチームを組むのです。僕の場合はしょっちゅう変わるので、まずデザイン画は一応見るけど、衣装候補を見ます。デザイナーと俳優が着たのではどうしても印象が違うので、俳優に着させて意見を出します。どんどん着替えてもらいながら、どのくらいの皺がよったのか、どういう素材でつくるのか、僕ら素人にもわかりやすいかたちで、説明してもらいます。色も素材も、具体的にしながらやっていくのです。私は衣装にうるさい演出家と言われてますね。デザイナー同士では、蜷川さんはデザイナーが言ってることをどうも信用していないから、実物を工房でつくって提示していくのが一番早い、と話しているらしいです。みんな直接には言わないのですけどね。

演出の仕事は、人間と人間が、どうやって出会って行って、どうやってものをつくっていくか、という人間の原点のような仕事です。みなさんは布などの素材でものをつくる造形的な仕事ですが、私の素材は人間です。自分の表現の対象というものが、私にとっては、俳優なのです。決して、モノという意味ではありません。その日、その時の感情とか、その人の問題を考慮しながら、演出をしています。その時に、気にくわないことを全部言ったらだめになる。これは一週間後に言おうかなとか、その人の性格とか、十分注意しながら駄目出します。時には物投げたほうがいいかな、



撮影：谷古宇 正彦

「キッチン KITCHEN」2005年公演 シアターコクーン

とか、考えます。空飛ぶ灰皿といわれてましたが、ボクは野球部だったから、絶対当てないですよ。アジテーションしているのです。それが演出家の仕事です。

年間に多くの演出をしています。その中で「自分で自分の作品を模倣すること」が無いように気をつけています。この年になると経験で、自分でどうやったらどうなるか、わかってくるのです。最近、自分の演出プランを一度作ったら、すぐやめちゃっています。根底に、まず人を驚かせたいというのがあるので、必ず今まで人がやってないことやりたいのです。ですから、自分で自分の得意技を封じるようにしています。けれども、自分を守ってくれるスタッフがいないとだめです。半分以上は目に見えないところにスタッフがいて、私の演出を守ってくれているのです。その一方で、冒険する場所というのが必要なのです。いつも緊張感がなければいけない。説明しなくても成り立つチームは危ないです。説明しないとわからない、という部分を残しておく、自分も論理的に整理するから、もう一回初心に戻れます。

蜷川 幸雄 (にながわ ゆきお)

1935年10月15日、埼玉県川口市生まれ。55年に劇団青俳に入団し、67年に劇団現代人劇場を創立。

69年『真情あふるる軽薄さ』で演出家デビュー。72年演劇集団「櫻社」結成、74年同劇団を解散後、「ロミオとジュリエット」で大劇場演出を手掛けるようになった。以来、名実共に演劇界の第一人者として活動し続け、近年も、98年から始まったシェークスピアの全作品上演計画、上演時間が10時間半という昨年の『グリークス』の公演など話題に事欠かない。また、83年の『王女メディア』ギリシャ・ローマ公演を皮切りに、毎年海外遠征を行い、ヨーロッパをはじめアメリカ、カナダなどで高い評価を得ている。ことに近年では、96年『夏の夜の夢』、97年『身毒丸』、98年『ハムレット』と、連続したロンドンでの公演が話題を呼び、さらに99年から2000年にかけてはロンドンとストラッドフォードで、ロイヤルシェークスピアカンパニーと共に、『リア王』を長期上演した。88年『近松心中物語』の第38回芸術選奨文部大臣賞をはじめ受賞歴多数。92年には、英国エジンバラ大学名誉博士号を授与された。また、84年に始めた「蜷川スタジオ (ニナガワカンパニー)」では、若手の演劇人たちと共に、積極的に実験的な演劇作品を生み出し続けている。2006年彩の国さいたま芸術劇場で55才以上の演劇集団「さいたまゴールドシアター」創設。

ファッション造形学科 眞田 岳彦教授セタガヤーンプロジェクト「庭を編」



本学の眞田岳彦教授は、2008年2月1日から17日まで、世田谷文化生活情報センター生活工房において、セタガヤーンプロジェクト'08vol.1「庭を編」という展覧会を開催しました。これは、世田谷という場を起点にして、人々のより良い生き方や家族の幸せを考えるフィールドプロジェクトです。先生はこのプロジェクトを本学の授業とも連動させ、女子美の構内でも学生と共に和綿を育てました。展覧会会場で眞田先生から展覧会のお話をうかがうとともに、眞田研究室の学生たちが、このプロジェクトから学んだことを取材しました。

庭を考えることを通じて、いのちを考える

眞田：今回のプロジェクトは、「庭を編む」というテーマにより、人間がつくり出す庭（ベランダ、屋上、公園などを含む）という空間から、デザインやアートを生み出し、「いのち」や「豊かな心」を見つめるきっかけをつくりました。

私も住んでいたことがあります。世田谷のイメージは、家族とか東京23区の中でも農地があるとか、ちょっといい暮らしとか、そういうものですね。約1年半かけてプロジェクトの準備をやっていく中で、「家族」「豊かな暮らし」をテーマにして、世田谷らしいことをしようと考えました。それで何か植物を育てましようということになりました。そこから紡ぎだしたもので、なにかつくれるんじゃないかな、それが世田谷らしくなるのではないかと考えました。セタガヤーンという言葉は、世田谷人とい

うことと、世田谷の糸からつくられるもの、という意味を込めて名づけました。

服をつくるとき、繊維からつくるという行為は、一番根源から問い直すことができます。いろいろなことを考えることができるのです。私には、この何年か日本国内のいろんな地域で進めているプロジェクトがあります。例えば新潟では、現地の方と女子美の学生と一緒に苧麻（からむし）という植物を山に入って採取して、繊維をつくっています。今回は世田谷という地域の、ビルの屋上で育てるということに挑戦しました。2007年の5月に綿の種を蒔いて育てました。

「庭」というのは象徴的な言葉です。我々が生活していく中で、人はいつも自分の足下とか、家の中に、豊かなフィールドを持っているのではと考えました。そこでいつも育っているにもかかわらず、それに気づいていない。日常性に自分が気づくか、気づかないか、ということ問い直してもらうことが、今回のプロジェクトの大きな目的だったのです。

日常の中にある「豊潤な心」

眞田：「庭を編」というプロジェクトを進めていく中で、科学哲学者の信原幸弘先生とのメールによる往復書簡を交わして、作品のテーマである「豊潤な心」について、深く思索することができました。先生から示していただいた言葉に、華嚴経の「重々無尽」というものがあります。「重々無尽」とは、万物は互いに無限に関係しあって融合一体化し、どの一つのものの中にも、他のすべてがあるというものです。

信原先生から、我々の「豊潤な心」を考える試みが、日常の断片化された世界を「重々無尽の世界」に変え、乾ききった心を「豊潤な心」に変える貴重な体験になるという励ましをいただくことができたことは、大変心強いことでした。綿一粒の種に重々無尽の世界が内包されており、綿を育てていくことによって、その命の時間を共有し悠久の時を感じるすることができます。そこに、潤いある心が立ち現れてくるということを経験することができるのです。我々は日々

の暮らしの中で、自分の近くにあるものから「豊潤な心」を見つけられるのではないかと、それが一番大切なのではないかと思っています。

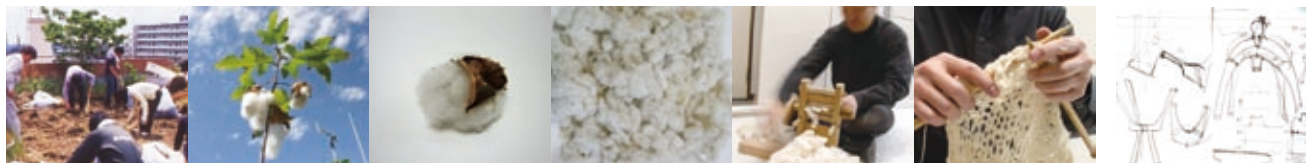
セタガヤーンの企画全体としては、他にもさまざまな試みを行いました。私は、展覧会を見るだけではつまらないと考えています。展覧会を見て、きっかけとして、その発想とかアイデアを家に持って帰ってもらいたい。この展覧会を通じて、私からみなさんに委ねたのです。生活の中で心が豊かになることを、本当はみんな知っていたはずなのです。それを思い出してもらおう契機になっただけなのではないかと思いました。

例えば、ワンルームやキッチンで作る箱庭、ポット菜園の提案（企業組合ランギット）として、植木鉢でいろいろな野菜を育てました。展示を見た人が、実際に自宅で小さな植木鉢を育ててみることに繋がったといいなと思いました。セタガヤーンフードとして、物語のある食材を使ったフードデザインのイベントや「庭をはむ」という食についての提案も行いました。（NEXT KITCHEN）また、実際に農協や企業の協力を得て、世田谷の農業の紹介や植物の苗などの販売（JA 世田谷目黒、世田谷ファーム）や、屋上、ベランダ庭園の制作方法やその実例の紹介（東光園緑化株式会社、田島緑化株式会社）も行い、世田谷区が緑化の助成を行っているという行政の活動を告知する機会にもなりました。世田谷区都市整備部都市計画課の協力で、世田谷の緑被分布表や緑地区分表も展示しました。地図をみることによって、暮らしている場所のどこに緑があるかを俯瞰してもらうことができました。

衣服という観点では、日本の編みの文化についての紹介（日本繊維新聞社）や綿に関する情報を紹介（日本綿業振興会）したり、すぐにできる染と編みの方法（Sanada Studio）を展示するとともに、染めや指編みのワークショップも行いました。

自分で自分の中を覗き込むニット作品

眞田：私自身の制作としては、春に世田谷





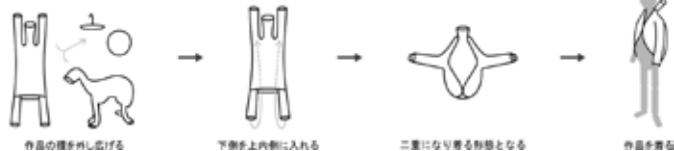
にあるビルの屋上に畑を開墾して和綿の種を蒔き、秋に綿を収穫し、綿を紡ぎ、編んで染め、衣服作品を制作しました。そこには多くの発見がありました。

現在日本で生産されているのはほとんどアメリカ産の米綿です。米綿は収穫量が多くて強い品種です。上を向いて育ちます。和綿は小さめで下を向いて育つのです。綿はもともとインド原産ですが、日本は寒暖の差がはげしいので、和綿は自然とそういう風になっていったのかもしれない。和綿は繊維が短くて加工しにくいので産業にならないので、日本の一部で産業として栽培されている他は、園芸で栽培されている程度で、伝統が消失してしまう寸前なのです。実際に綿を育てることによって、こういう植物の生態や産業や社会について学ぶことが大切だと思いました。また、制作の過程で感情の変化も感じることができました。まさに豊潤な心へ向かうプロセスがそこにあったのです。大地を耕し庭(畑)をつくる労働の喜び、生命の種子を蒔く願いの気持ち、生命を培う慈しみの心、猛暑の中での水遣りの苦勞もありました。実りへの感謝と収穫の達成感。自身で得た素材から糸を作る想像の快感と、大切な人を思い糸を編む愛情。編み物が出来上がる満足感と湧き上がる嬉しさ、大切な人に編み物を贈る場面を心の中に描く幸せ。そして、無限に続く想像の場という豊かな時が「豊潤な心」へとつながっていくのです。

今回は、小さなスペースで育てたため、そんなに多くの収穫はありませんでしたが、量よりも、世田谷で生まれたことに意味があります。生まれたものは何かということを考えることが重要だったのです。染色の色は、ケヤキとか植物を染料にして染めました。鉄媒染や明礬媒染で少し陰影をつけながら染めていきました。

作品のデザインは2月くらいから考えて、夏ごろ決定したものです。屋上で栽培した和綿を手紡ぎで糸にして、手編みしました。全身を覆った状態で展示していますが、実際は下側を内側に入れて二重にしてジャケットとして着るのです。これは自分で自

作品を着る



分の中を見る方法を示しています。折り込むことによって、自分で自分の中を覗き込むような行為になるのです。(説明図)と綿の柔らかな風合いがあり、二重にすることによってあたたかい服に仕上がりました。展示の仕方でも、中の針金のかたちをかえると、同じデザインでも大人になったり、子どもになったり、動物にもなります。子どもが喜んで、会場を駆け回っていました。

衣服だからこそできる皮膚感覚の力

眞田：私は純粋なファインアーティストではありません。自分の作品については、デザインから立ち上げて、アートのものが入った衣服だと思っています。父親が絵描きだったので、小さいときから、なんとなくデザインとアートの間を行ったり来たりする感覚がありました。最近、デザインは、もしかしたらそういう部分をもっと持つべきなのではないか、と思っています。ファインアートは、なかなかストレートに生活に入ってこないものです。ファインアートは世の中に対して、問題を提起したり、気づきを与えるものだと思います。デザインは、その問題に対して対処するものじゃないかといつも考えるのです。だから、もしできるのであれば、日本のデザインや我々の仕事が、問題提起をしながら解決もしていく、というような両面を提示していくことによって、何か新しい流れを生み出せるのではないかなと思います。

展覧会を通じて手応えというよりは、ありがたいという気持ちが強いですね。始まるまでは、いろんな人にいろんなことお願いして混乱していますが、オープンすると気づくのです。本当にいろんな人がいて、やっと企画が実現するんだということに。そういうことこそが、ものをつくるプロジェクトなのだと思います。プロジェクトは時間をかけて、多くの人力を結集して



つくりあげるものです。作家というのは、ひとりの作業のように思われますが、違う側面があるということをお忘れはいけません。

今回、「豊潤な心」を考える、ということをお作品のテーマにおいて、多くのことを考えることができました。私は今、「豊潤な心」を感じることは、衣服だからこそできることだと考えています。66億くらいの人間が、みな衣服を着ているということは、同じ感覚を感じることができるはずなのです。言葉とか音楽や絵画よりも、肌の感触とか、皮膚感覚とか、そういうものを絶対に持っているはずなのです。でも我々は都会に暮らしているということで、隠されてしまっている。今回の展覧会で、多くの人がおもしろがって足を運んでくれたのは、そういう皮膚感覚を思い出してくれたのかもしれないですね。

■眞田研究室活動報告

眞田先生は、ご自身のクリエイティブ活動を女子美の授業に連動させています。今回、女子美にも和綿の畑をつくりました。去年の夏は非常に暑く、みんなでペアを組んで、交代で水やりをして育てました。女子美の畑は環境も良く、かなり収穫もありました。柔らかい女子美産の和綿を少しずつ分けあって、作品づくりを進め、学生たちの作品展を計画しています。

無形のものへの価値感を模索する

眞田：自分自身のさまざまな活動と、女子美での教育活動を連動できたらいいなと考えています。なかなか難しいですが、私が女子美で学生とかかわりを持たせて頂いている意味は、そういうところなんだと思っています。自分がやっていることを学生たちと一緒に共有できるといい。実は、私たちは、稲藁で作品も作るので藁が欲しいので、女子美で稲藁プロジェクトもやっているのです。みんな働き者なので泥だらけになりながら頑張っています。

「庭を編」プロジェクトで、ニット作品を提案したのは、現在、日本のニット産業は、あまり元気のない状況ですでもう一度編み物を身近に感じ、考えるきっかけになれば、という思いもあったのです。日本繊維新聞社も共感してくれて後援してくれ

ました。大量生産の20世紀のデザインによって、我々はこれだけ豊かになった。けれども今となっては、無形のもの価値観をどうつくりあげるかが、課題となっているのです。その両者のバランスをどうとっていくかが難しいところですね。女子美で学生たちとこういうことを模索していくことは、すごく大切だと思います。何故かという、文化というものは継続して重ねられてゆく、そして、つきつめていくと子どもの時に家庭の中で絵をみたり、美術に触れることで感動する力が芽生え、その体験が重なることで人は豊かな大人になれるように思います。その意味からすると女性が美術を学んで、プロになる事もそうですが、家庭や家族に活かしてゆける事が出来れば、すごく意義があって、日本人の心の豊かさをさらに育む原動力にもなると思うのです。

学生を見ていて思うのですが、卒業して即戦力として使える人間をつくるのではなく、15年後、20年後に、社会で活躍したり、豊かに家族や周りの人と関わって生きていけるような人材を育てていきたいですね。女子美の学生は、他の共学の美術大学とは異なる独自性と想像力や豊かさ、そして、人が生きるのに一番大切な純粋な心を持っている。そのまま生きていければ幸せなのですが、やはり社会の中では葛藤が出てきてしまう。そういう時に彼女たちが戻れる母校や友人がある、という場の創生をお手伝いできればと思います。(眞田岳彦)

綿を育て、学ぶ 箱根研修

2008年2月25日箱根において、学部生と大学院生が集まり研修会が行われました。9名の学生が、綿栽培の実習を通じて学んだことと、自分の作品についてのプレゼンテーションを行い眞田岳彦先生、二宮とみ先生からの厳しくもあたたかい講評を受けました。

4年生は卒業制作を進めながら多忙な中で、最後の課題です。プレゼンテーションでは、一人の人に、必ずコメントーターを一人決めて、発表者に対し一歩前進する質問やコメントを与えるように、ルールを決めています。このルールによって、お互いに信頼の上で、批評をし合える雰囲気づくりがなされていました。また、各自マケットを作成してきましたが、本当に自分のアイデアを形にできているのか、現実には制作可能なものであるのか、単純にかっこよい作品になるのかなど、鋭い指摘がなされていました。

綿の栽培という体験を通して、学生が自

分の感性で何を受け止め、何を考え、どんなアイデアを生み出すか。さらに、そこから進んで、具体的な衣服への可能性を掘り下げ、今度は、技術の世界に移行し、チクチク縫ったり、根気良く編んでいく作業



■学生からの作品コンセプト

- 綿を殻から取り出した時、殻がきれいな五角形をしているのを見て、ユニット構成の授業を思い出した。そこからユニットについて考えて、自分自身がユニットとして、社会とどのように連結しているのかを探り、連結部分にある「安心感」をつながりということと温度によって表現したいと考えた。
- 綿を使って、「靴と足と人」という身体問題を考えてみたい。人間が身体を忘れて脳だけで動いてしまっているが、人間の内なるメッセージは、足が象徴する行動の中にあるのではないか。そこで、足に口をつけた作品をつくって、自分自身と向き合うことを提案したい。
- 綿花のふわふわ・ホワホワした感じから、人間は視覚で捉えたものを音として認識しているのではないかと考えた。物体を音で表現している。それは母体の中で体感した経験なのではないか？イヤホンと綿をつなげ身体全体にめぐらせて、音を通してなごられる感覚を表現したい。
- 綿は命を包むものである。そこから人間を包み、守ることを考えた。人は守るものがあると強くられる。人は守るものであり、守られるもので

を行います。ここに紹介するのは学生のアイデアの種の部分です。この種が、先生方の指導のもと、展示会までにどのようなプロセスを経て実際に衣服という形に姿を変えるのか、期待されます。



- あると考え、人間が抱き合ったかたちを考えてみた。相互に関わっていくことを考えてみたい。
- 綿は、成熟した時にはじけるものである。これを「満たされたからはじけた」と解釈し、綿を満たされた状態の象徴と考えた。「人間は心が満たされないといいながら、案外満たされているものである」ということを作品に表現したいと考えた。
- 綿を栽培して、命について考えた。生きるということはどこからどこまでなのか、生と死の境界線はないんじゃないか、ということを考えて、記憶をキーワードに制作したいと思った。幼少の思い出として、ぬいぐるみとか人形がある。ぬいぐるみには自己を投影したり、少女が性的な欠落を補う意味をもたせることがある。綿で記憶の象徴としてぬいぐるみ制作したい。
- 綿の種を見て、実際に栽培をして、植物も私たち人間と同じように呼吸をして生きているということを感じた。人間は生きるために酸素と水をつかって肺呼吸をしている。呼吸をテーマに、人間の呼吸と、植物の呼吸を作品に表現したい。

■2007年綿栽培報告

女子美の和綿畑の開墾と畝づくりは、2007年6月9日に行いました。開墾後1週間土地を休ませてから、6月14日に種まきをしています。看板を6月19日に立てました。水遣りは、週に3回。夏休み中は、当番を決めて行っていました。草取りは、水遣りに行った際、気付いたらするようにしていました。小さな芽が出たときのその可愛らしさと、感動は今でもはっきりと覚えています。その後は、なかなか思っていたような変化が見られませんでした。夏休みの中ごろには、ジャン

グルのような綿畑が出来ました。通常の綿畑では、収穫しやすいように、刈り込むそうですが、自然のままに伸ばしました。綿がはじけるまでに、とても時間がかかり、もう枯れてしまったのでは？これ以上は生長しないのでは？と不安な日々が続き、みんなで心配しながら見守りました。11月8日、今日もダメだろうと思いつつ畑に行ったら、遠くからでも白く、はっきりと綿が見えました。寒さの中でじっと耐え、開いた綿はとても綺麗で柔らかくて、力強かったです。(修士2年・青野素良)



女子美術大学産「木綿」展 (Joshibi Yearn / Cotton)

2008年5月31日(土)～6月5日(木)
会場：ターミナルラウンジ東京都港区高輪3-18-11
03-3446-6055 (品川駅より徒歩8分)
企画：女子美術大学大学院 眞田岳彦研究室

女子美術大学で産出された木綿を使い「女子美術大学(生産の場)、日本綿(素材)、展示場(広える場)、女子美術大学生(作者)」を結び、<100年の「とき」と「いのち」>をキーワードに繊維造形小作品展を開催します。是非、お越しください。

眞田 岳彦 (さなだ たけひこ)

女子美術大学 芸術学部 ファッション造形学科・大学院 美術研究科 教授。衣服造形家/デザイナー。1962年東京都生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、ISSEY MIYAKE INC.勤務。1992年からロンドンに滞在して、イギリス人彫刻家 Richard Deaconの助手を務める。2002年眞田造形研究所を設立する。メゾンエルメスでの個展(2002年)、森美術館での企画展(2004年)など、国内外で展覧会を行っている。ジャンルを超えた多彩な制作活動を行い、高い評価を得ている。心とデザインの間を考察する「プレファブコート」の制作や、日本各地域で「日本繊維再考プロジェクト」を行い、苧麻、稲藁などの素材研究を地域の人々とともにしている。本学において、2001年より教育活動を行なっている。

杉田 敦 准教授著 新刊「ナノ・ソート」紹介



1月初めに、一冊の本が出版された。『ナノ・ソート 現代美学…あるいは現代美術で考察するということ』（彩流社）。いわゆる美学書や、教科書とはおもむきが異なる。言ってみれば、目まぐるしく変化するアートに対して、言語によってひとつの実践を試みるということか。著者は女子美で現代美術、美学、教養ゼミなどの教鞭をとる、杉田敦准教授。本について、そして芸術、日々の活動、女子美について、幅ひろく語ってもらった。2月下旬のとある日の午後、多摩川をのぞむギャラリーにて。

一本著が出版された経緯をお話いただけますか？

杉田：過去10年近く、雑誌や展覧会カタログのために、書きためてきたものをベースに、書下ろしを加えて一冊にまとめたものです。今の目で見ても、考え方に開きがあると感じたものは、実際のところほとんどそうだったのですが、加筆するというか全体的に書き直しました。まとめる作業に入った時期と、女子美に来た時期がほとんど同じということもあり、自分の中では、この本と女子美は重なりあっています。この本を読んだ学生から、講義で聴いた内容とリンクすると言われました。それはその通りで、でもだからといって、講義のための教科書ではありません。来年から、教科書に指定している授業もあるにはあるんですけどね。いわゆる、狭い意味での現代美術の専門書ではなく、そこから興味に応じて、思想や社会問題、あるいは他分野の表現へと広がっていくことができるように書きました。現代美術に興味を持ち、友人どうしで語り合ったり、現代美術について考え始めるための手がかりになったらと思っています。よく、学生に現代美術に思い入れが強いのだと言われるのですが、現代という時代に生きていて、同じ時代を生きる作家の表現に興味があるだけのこと

です。歴史上の表現を軽んじるつもりはまったくありませんが、それをよりよく知るためにも、まずは自分の生きている時代の表現から考えていきたいというのが僕のスタンスです。

また、制作者にとって意味のあるものになるようにも努めたつもりです。これは、書かれている知識が役立つということではなく、自分自身の考えを言葉で語ることが、制作をすることと同じように重要であるということをお伝えしたかったのです。制作者が自分の作品を自分の言葉で語ることはとても大切なことです。そうするためのきっかけのひとつとして、本著が役立ってくれればと思います。

一章のなかで、特に思い入れが強いものはありますか。やはり、ジェームズ・タレルかなという印象を受けたのですが。

杉田：タレルや、クリスティン・ヒル、ティルマンズなどは、比較的、明確に言いたいことが構造化されていると思います。その意味では、書いていて面白い作家ではあったのですが、思い入れということでは、近年、顕著になってきた個人の切実な物語をベースにした作家たち、エイヤ＝リサ・アッティラについての章や、ピピロツティ・リストなど、曖昧模糊としたイメージを言語化した章の方が思い入れが強いかもしれません。とりわけ、フィッシャー＆ヴァイスは大好きな作家でもあり、特に思い入れがあると言ってもよいでしょう。漠然としたイメージを言語化していくという作業に、意味を見出しているようなところがあります。

言語化する際には、自分の背景にある思想を経験を反映させることを心がけています。本を書くことで伝えたい、やっていきたいことは、いわゆる作品論、作家論ではありません。言語に期待される、事物や人、現象などの解明という安全地帯に閉じてもっている限り、言語はひとつの実践として見なされることはありません。これは、カルチュラル・スタディーズなども標榜していたことですが、解明するのではなく、ひとつの実践としての言語の可能性を追究できたらと思っています。ここにあるものは、特定の現代美術の表現の解釈を行おうとするものではありません。でも同時、それらの表現がなければ生まれ出ることがなかった言葉でもあります。いまだに、言語にかつてのような機能を期待している人に

芸術学部芸術学科3年生 杉本 藍・山崎 絵梨

は、一見すると感想を書き連ねたようにも見えるかもしれませんが。けれども、これはアートというフィールドのひとつの実践なのです。評論家の多くは、アートというフィールドに生起する出来事を、少し外に立って眺めているという姿勢を持っています。けれども、評論家や批評家も、ひとりの主体として、アートというフィールドの中にいるべき存在だと思います。最初の章に書かれている、「極小の思考。その意味は内容ではなく、むしろその実践にこそある」というのは、そういう意味でもあるんです。—“実践”ということについて、運営されているスペース、art & river bankや、女子美など、なんでもいいのですが具体的に聞かせいただけますか。

杉田：女子美について言えば、教育ということも、アートというフィールドの実践のひとつです。僕は、教師は一方的に教える立場にあるのではなく、学生と話したり活動することで、自身の考え方をチューニングしていく、つまり学ぶ存在でもあると思っています。与えるだけでなく、自分もまた学び、楽しむ。そうしたことと、言語による表現とは、少なくとも実践という地平においては、同等のものだと思っています。学生に言いたいことのひとつは、こうした言語を、もっと活用して欲しいということです。アートセオリー（美術理論）を顔料や材料と同じように、素材のひとつとして利用して、自身の表現に活かして欲しいですね。

—女子美での今後の展望として、何かありますか？

杉田：学生と話し、何らかのプランを設計し、行動を起こしていく、実践していくという意味で、教養ゼミなどは楽しいのですが、言ってみれば現代美術の間口を開くためのものとも言えます。今後は、次の段階というか、より強い意識を抱きはじめて学生たちと、高いレベルのことも試みていきたいと思っています。

構成：杉本 藍、山崎 絵梨（芸術学科3年）

杉田 敦（すぎた あつし）

1957年生まれ。名古屋大学理学部物理学科卒業。女子美術大学 芸術学部基礎教養系・大学院 美術研究科 准教授。美術批評家。オルタナティブ・スペース、art&river bankディレクター。著書に、『メカノ』（青弓社）、『ノード』（青弓社）、『リヒター、グールド、ベルンハルト』（みすず書房）、『白い街へ』（彩流社）、『アソーレス、孤独の群島』（彩流社）、『ナノ・ソート 現代美学…あるいは現代美術で考察するということ』（彩流社）など。展覧会論文に『存在としての光』（James Turrell、水戸芸術館）、『機械たちの戦争』（マヌエル・デ・ランダ、ASCI）がある。

Graduation ● 女子美スタイル☆最前線 ギャラリートーク

「女子美スタイル☆最前線」は本学の芸術学部、短期大学の全学科が参加する、卒業制作選抜学外展です。2007年から開催され、今年が2回目になります。今年度は「JOSHIBI rainbow award」と題し、虹の色を冠した賞を設け、表現者としての可能性を感じさせる感性、才能、問題意識をもつ作品に授与しました。

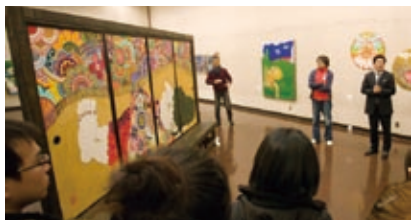
展示は、学科や、平面や立体というアートフォーム（表現の形態）によって分類するのではなく、作品に潜在するテーマごとに学科を横断するかたちでまとめられています。「物語性」、「ヒストリア（歴史と記憶）」、「探求」、「引きだされる行為」、「形態の生成」、「機能の考現学」、「深層の心」の7つの視点が設けられました。

※「物語性」は、作品の中に、物語の気配や、物語への意志をたたえたものを中心に構成されています。「ヒストリア（歴史と記憶）」は、積層されてきた時間を見つめるもの。そこには、今まさに積み重ねられようとしている現在も含まれることとなります。「探求」は、表現の背景に向けられた分析しようとする視線。「引きだされる行為」は、日常の行為や実践と表現の関係を探ろうとするもの。「機能の考現学」は、いまある機能を見つめ直し、組み替えようとする試み。「深層の心」は、心奥の光と闇を見つめることから生まれ出たもの。



2月17日に、本展覧会のディレクタを務める芸術学部基礎教養系の杉田敦准教授を進行役に、芸術学部芸術学科の南鳥宏教授、「BRUTUS」の副編集長の鈴木芳雄氏、小山登美夫ギャラリーの小山登美夫氏をゲストに招いてのギャラリートークがおこなわれました。（写真右より順）

☆ ☆ ☆



『一瞬の時』
横田 智里(芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース)

南鳥：日本家屋の襖っていうのは、建築と絵画が一体化されていますね。それをこういう作品にアレンジしたというところで、

単なる平面世界じゃなく、前と後ろの大きな空間も加え込んだものになっていると思います。

杉田：この作品がデザイン学科から出てきたというのはとても面白いと思っています。デザインの作品の中にこの作品をポンと置いておくとデザインっぽくも見えますのですが、そうじゃない視線の中に置くと違って見えてくる。南鳥先生がおっしゃったような、グラフィックの意味としてだけではなく、そのような読み方にも十分耐えていけるだろうなということ、ここに選ばれたのだと思います。

ultraviolet prize選者：永作博美(女優)
永作博美さんコメント「選考基準をどこに設定するかに迷いました。芸術性で選ぶのはおこがましいので、これは自分が欲しいと思ったものを選んで結果です。他の皆さんにも言えることですが、創造することを諦めずに頑張り続けて欲しい」

☆ ☆ ☆



『On that day I...』
秋山 友佳(芸術学部工芸学科織コース)

杉田：段ボールの断面に写真のイメージが転写してある作品ですね。いわゆる工芸の織の作品というイメージからは懸け離れています。そのためか、学科からは推薦されていませんでしたが、みんな高く評価しました。

秋山(作者)：ある日の記憶をテーマに、この段ボールの断面に写真を焼き付けることで、一つの記憶の連鎖反応みたいなものを表現できたらいいなと思いました。

小山：アイデアとしてはわかりやすい。もちろんアイデアだけでは駄目なんですけど、この作品は形や色、長さ、大きさとか、奥行きとか、そういったものがテーマと合っているなど。テーマと最終的な形態というのが、非常に考えられている。作品として見た場合に、完成度がすごく高いというのが、僕が選んだ一つの理由です。

orange prize 選者：小山登美夫(小山登美夫ギャラリー)

☆ ☆ ☆



『SWEET TYPES』
W2000×H3000×D10、本1点、紙、活版印刷
牧野 友里子(芸術学部デザイン学科VCDコース)

鈴木：活版印刷はある意味、特に僕たちの出版の現場では、今はもう終わってしまった技術というらえ方をすることが多いと思います。これがあって、写植があって、コンピュータのデジタル DTP の時代になっているわけです。そういう歴史を実際に知っていて、そのうえで今後出版や印刷などの仕事に関わってもらえるといいなという思いがあります。この作品は分厚い紙にプレスを押した跡があり、今のレーザープリンター、オフセット印刷にはないテクスチャーの感じが出ているのもいい。

yellow prize選者：鈴木芳雄(「BRUTUS」副編集長)

☆ ☆ ☆



『日々』 W350×D350×H300cm、木綿、映像
照山 弥生(芸術学部ファッション造形学科)

杉田：これは毎日着ては脱いだTシャツを、縫うことで1日を封じ込めていくという作品です。女子美のファッション造形学科はちょっと異質なものをもっていて、単に衣服を作るということだけではなく、時には服自体を台無しにしていくような行為まで視野に入れていくところがあって、とても面白いなと思って見えています。

南鳥：欲をいうと、会場も制作期間も限られてはいますけど、1,000枚ぐらい観たいですね。国際展覧会に行くと、そのぐらいのボリュームでその意識を伝えることが普通に行われている。あとは、ビジネスにつなげていくっていう時に、これ、そのまま売ってもいいと思うんです。縫ったものをそれぞれに解いてもらって着てもら。あなたの1日を一度封印したものを他者に

よって解き放ってもらって、そして着てく
ださいと。とてもかっこいいTシャツにな
ると思うんですね。

indigo prize 選者: 杉田 敦(美術評論家/本学芸術
学部基礎教養系准教授)

☆ ☆ ☆



『ばなナバ』

秋元 理恵(短期大学部造形学科デザインコース情報メディア系)

秋元(作者):身近な“バナナ”を探して、家
のリビングでシュガースポット(バナナの
黒い点々らしきもの)を探し回ったら、見
つけただけで100以上ありました。それか
ら新聞でバナナが表現できるんじゃないか
と思って、新聞の中の「バ」と「ナ」の字
すべてに印を付けて作品を制作しました。

鈴木:面白いと思います。ウズラの卵って、
二つとして同じものがなくて、それだけ
を撮っている写真家っているんですよね。例
えばバナナのシュガースポットだけを写真
で撮り続けることもできるかもしれないし。
何千個、何万個と。それを思い出したので
すが。新聞もたぶん二つと同じものはない
と思うので、どれだけ数があるか、数の勝
負みたいな考え方にも発展するかなって。
同じものを繰り返すっていうことが一つの
運動かなと思いました。

green prize 選者: 北川フラム(アートディレク
ター/本学芸術学部芸術学科教授)

北川教授コメント:「新聞紙という社会性の強い
材料を紙にはさんでデザインする、そのアイデア
と美しさが良かった」

☆ ☆ ☆



『ゆきんこ急須』

倉富 智子(芸術学部工芸学科陶コース)

杉田:この急須の作品は、陶っていう伝統
的な素材の枠の中で、しかも急須という伝
統的な形態を作り続けたものですが、日々
作り続けていく中で、微妙にどれも形が違

う。それを数多く見せるかたちで、形が生
まれ出てくるころの秘密を探ろうとして
いるところが面白い。

blue prize 選者: 住友 文彦(東京都現代美術館学
芸員)

住友文彦氏コメント「ひとつのモノを作り続ける
ことに、ひとつの表現の面白さがある。今後、本人
の意思次第で広がりが出そうです」

☆ ☆ ☆



『Crossed wiring-mirror』

アルミ合板 182×91cm 2枚

『Crossed wiring-light box』

ライトBOX 30×30×30cm

『Crossed wiring-microscope』

25×25×90cm

中藤 理恵(芸術学部絵画学科洋画専攻)

中藤(作者):私は生まれつき視神経が細い
ので、偏頭痛と一緒に幻覚を見るっていう
体質なんです。それでギザギザしたものや、
曼陀羅のような形とか、光るものとか、そ
ういう幻覚をモチーフにして制作しました。

小山:この作品は、アルミに直接ギーギ
削っていったということですけど、その手
法が重要なんですか?紙に鉛筆で描くって
いうのと、どんな感じで違うの?

中藤:何かやっぱり削る行為が、自分の中
の痛みも含めた身体の現象と近いものが
あって。

小山:それが自分の方法として合っている
んですね。顕微鏡の色彩の組み合わせもあ
まり見たことがないタイプですごく魅力が
ある。やりたいことと、最終的な作品の形
態っていうのが不自然じゃなく繋がって
いる。それはすごく大事で、それが基本だ
と思うんだよね。サイズとか素材に対しても
無理もしていなければ不自然でもない。そ
れが自分で見つけられたっていうのは、幸
福なのではないかと思います。

red prize 選者: 佐野ぬい(洋画家/本学学長)
佐野学長コメント:「絵描きとして、描くという行
為に共感しました。」

☆ ☆ ☆



『空気』

広井 彩香(短期大学部造形学科デザインコース情報メディア系)

杉田:パッと見はわからないのですが、全
てのものにサインペンでビッシリ丸が描か
れていて、鬼気迫るものがあります。

広井(作者):自分の身の回りにある空気
のような存在だなと思うものを探る感じで描
いていきました。

南鳥:日常品であるということがポイント
ですね。それとこの模様はペイントではな
く輪で半透明で、完璧に遮断していない。
けれども、意識の上では僕らはある種の遮
断をこの文様によって作り出していく。
ひょっとしたら僕らは、あらゆるオブジェ
に対して、見ているのは表面でしかなく、
その表面に何らかのバイアスを掛けること
によって、その意味を食い止めているのか
もしれない。あらゆるものは、こうした表
情を持っていて、それを彼女が発見したの
かも。こんな表面の表現なんて、ちょっと
見たことがありそうでないんですよ。しか
も美しい。美しいって言うのはとても大事。
だから、あと200点は観たい。で、静かな
静謐な空間にこれを並べたら、ちょっとく
るものがあると思いますね。

violet prize 選者: 南鳥宏(美術評論家/本学芸術
学部芸術学科教授)

4人の審査員からの総論

小山:アーティストとしてやっていくには
明確に自分がやりたいこととか、自分の方
法を掴むことがすごく大事です。どのジャン
ルでもですが、自分が何者であるのかを
見つけることが、全てにおいて大事だと思
うので。学生は社会のことはあまりまだわ
からないだろうけれども、学生のうちに何
をやりたいかっていうことをきちんと見極
めることが、すごく大事じゃないかと思
いました。

鈴木：今回観せていただいて本当に面白い発見があるなど。何か作っていく上で、若い人たちはこういうものを考え、こういうものを作って、あるいはこういうものと闘っているんだなということがわかったのは、僕にとってすごい収穫です。今後も頑張ってください、また引き続き作品を観せてもらいたいです。

南島：今までは君らを指導してくださった先生はいろいろ言うてくれた。時には喧嘩もしたでしょう。でもそのありがたみがわかるのはこれからです。社会に出て、君ら

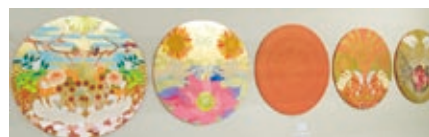
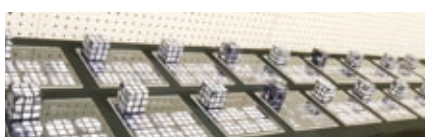
が作品あるいはデザイン1本で勝負をしていく時に、喧嘩なんかしてくれるうちはまだ華。無視です。黙殺。その黙殺にどれだけ君らが耐えて、自分の信念の表現につなげていけるかが、これから問われていく。どれだけ女子美の時代に恵まれていたかが、わかるでしょう。だから、そのことをもう一度自分の奥底に据えて、社会に出ていく時の厳しさを覚悟してほしいと思います。

杉田：この展覧会は欧米の degree show を目指して、「卒業後の思い出」のためではなくて、外へ踏み出す第一歩として企画さ

れたものです。今日こうやって小山登美夫さんと、鈴木芳雄さんにいろいろ親身になって意見を言うていただいたことは、外からの声の第一歩です。ただ、同時に南島先生がおっしゃったように、まだかなりゲタを履かせてもらっているところがあると思います。今後はゲタがすっかりとなくなった厳しい状態になると思います。それでも、自分のやりたいことをぜひやって、その中で自分なりの達成感というものをぜひ手にしてほしいなと思っています。

2007年度 卒業(修了)制作展

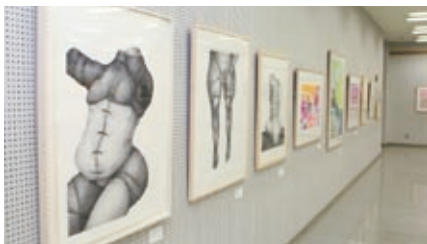
短期大学部



Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

芸術学部・大学院



●平成19年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(芸術学部)

〔卒業制作賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

太田 智子
込戸 かなな
福本 綾
森 はんな
関 真梨子
原田 祐子
豊島 友美
布目 聡美
土師 朋美
横田 智里
石塚 亜弥子
佐藤 恵
田中 由子
張替 由起子

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

〔卒業論文賞〕

〔芸術学科〕

瀬田 ユミ

〔優秀作品賞〕

〔絵画学科〕 洋画専攻

池田 香央里
内山 貴久子
菅野 静香
吉田 ゆう
吉田 真美
斎藤 英恵
大嶋 由美子
松岡 日奈子
登尾 真帆
福島 さやか

〔絵画学科〕 日本画専攻

〔工芸学科〕

〔立体アート学科〕

〔デザイン学科〕

雨宮 玲子
黒田 望美
斉藤 昌子
関口 弥生
前中 英恵
芳澤 ひとみ
森 みどり
小泉 雅恵
中島 慧美
本間 由貴
森 万希子
名古屋 緑
宮園 夕加

〔メディアアート学科〕

〔ファッション造形学科〕

〔優秀論文賞〕

〔芸術学科〕

芹澤 由貴
細野 敦子

●平成19年度 卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞 受賞者(短期大学部)

〔卒業制作賞〕

〔造形学科〕 美術コース

(絵画) 富樫 早智
花嶋 恭子
(彫塑) 鶴田 敦子

〔造形学科〕 デザインコース

・情報メディア系

平野 文子
村澤 沙也佳
涌井 萌実

・空間インターフェイス系

佐藤 睦

・クラフトデザイン系

(陶芸・メタル) 安部 真理子
(テキスタイル) 久保 有香子
(刺繍) 高野 真里江

〔修了制作賞〕

〔別科〕 基礎造形専修

山田 安佳里

〔優秀作品賞〕

〔造形学科〕 美術コース

(絵画) 石毛 文乃
落合 綾香
吉澤 舞子
(彫塑) 山口 梨花
甲斐 春奈

〔造形学科〕 デザインコース

・情報メディア系

板垣 彰子
井上 千明
粕谷 友貴
小島 絵美
畑 友理恵
国井 直枝
坪井 麻希

・空間インターフェイス系

・クラフトデザイン系

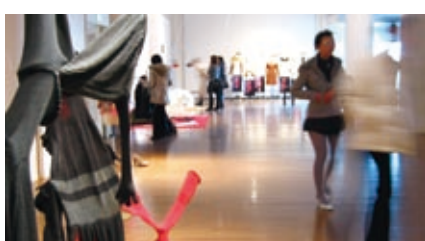
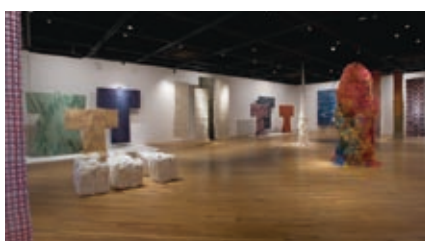
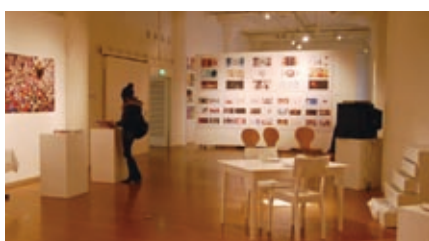
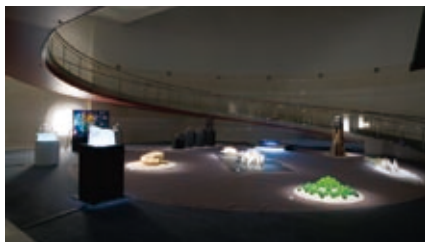
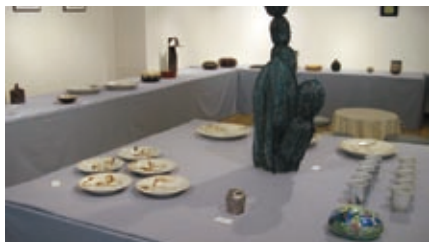
(テキスタイル) 多久和 美萌
(刺繍) 濱島 彬子

〔専攻科〕 造形専攻

・陶芸・メタルコース

緒形 あゆみ
藤澤 真侑

・テキスタイルデザインコース



その他の卒業制作展

大学院 美術研究科

- 美術研究科美術専攻版画領域修士2年生
3月17日(月)～3月22日(土) (銀座東和ギャラリー)
- 美術研究科美術専攻洋画領域修士2年生
[女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士2年制作展「out of square」]
1月27日(日)～2月3日(日) (ギャラリー青羅)
- 美術研究科美術専攻博士後期課程造形表現領域
[鈴木かよ 修了制作作品展]
2月4日(月)～2月9日(土) (ギャラリー青羅)
- 美術研究科美術専攻洋画研究領域修士1年
[女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士1年制作展「青」]
2月10日(日)～2月16日(土) (ギャラリー青羅)

芸術学部

- 絵画学科 洋画専攻 版画コース
[版ガリアン (女子美術大学卒業展)]
1月25日(金)～1月30日(火) (H.A.C.GALLERY)
- 工芸学科 染コース
[展覧会名称:女子美術大学芸術学部工芸学科 2008年卒業制作学外展]
2月21日(木)～2月24日(日) (ギャラリー・ル・ペイン)
- 工芸学科 織コース
2月22日(金)～2月24日(日) (会場名:アクシスギャラリー)
- 工芸学科 陶・ガラスコース
2月22日(金)～2月26日(火) (スパイラルガーデン)
- デザイン学科 VCDコース
3月20日(木)～3月23日(日) (Bank ART studio NYK)
- デザイン学科 PDコース
[展覧会名称:女子美術大学 デザイン学科 プロダクトデザインコース卒業制作展]
3月21日(金)～3月23日(日) (東京デザインセンター)
- デザイン学科 EDコース
[「コタエ」～女子美術大学デザイン学科環境デザインコース卒業制作学外展～]
3月18日(火)～3月23日(日) (GALLERY LE DECO)
- ファッション造形学科
[女子美術大学ファッション造形学科卒業制作展]
2月1日(金)～2月3日(日) (Bank ART studio NYK)
- メディアアート学科
[展覧会名称:女子美術大学芸術学部メディアアート学科第4期有志「4+」]
1月29日(火)～2月3日(日) (横浜赤レンガ倉庫1館2階)

短期大学部 造形学科

- デザインコース・クラフトデザイン系 陶芸・メタルデザイン
[陶芸・金工・漆芸展]
2月24日(日)～3月1日(土) (ギャラリー青羅)
- デザインコース・クラフトデザイン系 テキスタイルデザイン2年・専攻科
[テキスタイルデザイン卒業制作学外展]
2月25日(月)～3月2日(日) (銀座アートホール)
- デザインコース・クラフトデザイン系 テキスタイルデザイン 研究生
[展覧会名称:女子美術大学 短期大学部 テキスタイル研究生修了制作展「1・2・3」]
2月25日(月)～3月1日(土) (ギンザギャラリーハウス)

平成19年度 加藤成之記念賞

- 〈大学院〉
美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸領域
喜多 みづ恵
- 〈芸術学部〉
絵画学科 洋画専攻 廣瀬 公美
絵画学科 日本画専攻 高村 めぐみ
工芸学科 秋山 祐貴子
立体アート学科 松本 理沙
デザイン学科 斉藤 和知
メディアアート学科 静岡 裕子
ファッション造形学科 張替 由起子
芸術学科 芹澤 由貴
- 〈短期大学部〉
造形学科 早川 昌代
専攻科 那須野 愛子
別科 中川 未央

平成19年度 福沢一郎賞

- 大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
柳瀬 あかね
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域
片平 菜摘子

平成19年度 大久保婦久子賞

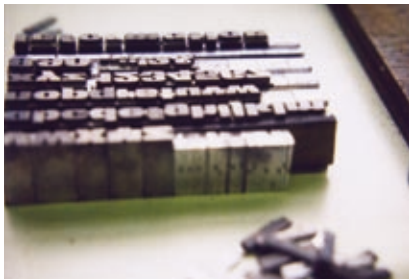
- 大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
西尾 真代
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 日本画領域
山下 聡美
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域
垣内 真理
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術領域
飯嶋 桃代
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 ヒーリング造形領域
吉岡 聖美
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 ファッション造形
井上 織衣

平成19年度 女子美術館収蔵作品賞

卒業(修了)制作で優秀な作品を女子美アートミュージアムの所蔵作品とします。

- 〈大学院〉
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術領域
横田 典子
- 〈芸術学部〉
絵画学科 洋画専攻 廣瀬 公美
絵画学科 日本画専攻 佐竹 智子
工芸学科 小森谷 薫
立体アート学科 蝦名 那津子
デザイン学科 有村 佳奈
メディアアート学科 八木 万里子
ファッション造形学科 小平 由美

クローズアップ② 欧文タイポグラフィ研究会



本学芸術学部デザイン学科4号館の一角に、活版印刷の工房があります。活版印刷とは一昔前の印刷技術ですが、その独自の印刷の風合いは現在のデジタル製版にはないものです。例えば古本の印字面に見られる微かな凹凸。これは活字が紙にプレスされたときにできるものです。活字は合金を鋳造した判子のようなもので、ちょっとした文章を印刷するにもそれらを一字一句拾い、ポイント（サイズ）ごとに揃え、文章や図版などを組み付けし、行間や余白にはインテルやクワタなどの込め物で詰めるなどの工程を経ないとなりません。大量の活字を必要とし、人手や手間もかかり、何よりもそれらの技術や設備の保存には並ならぬ労力が必要です。

欧文タイポグラフィ研究会は今までデザイン学科が所有していた日本語の活字や新たに購入した欧文活字などをきれいに、使いやすく整理し続けていました。整備が整う前は歴史的資料の意味合いが強かった道具類ですが、今では工房と呼べるまでに機能しており、今年卒業を迎えた研究会のメンバーのうち4名が活版印刷を用いた卒業制作を発表しています。

牧野さんの卒業制作『SWEET TYPES』

は学部の活字工房に a～z まだが完全に揃っている欧文37書体の活字見本帳です。「自分達が整理して使いやすいようにしてきた工房を、後輩達にも受け継いで欲しい。この工房にどんな書体があるのかが分かりやすく、調べやすいようにという想いで作りました。」それぞれの書体見本の裏にはその書体名と作られた年代、会社、国名、設計者の名前が英語と日本語の表記で印刷されていて、書籍などで調べやすいようにという配慮がうかがえます。

もともと文字に興味があり好きだったと語る面々。ただ活版印刷のことは知らなかったという。「ある日、大学で活字の整理のアルバイトを頼まれ、手伝いにいった先で初めて活版印刷という技術や道具があったことを知りました。活字の整理を始めたばかりの頃は、展示用の物だと思っていて、まさか使用する物だとは思ってなかった」と笑いながら話す木村さんも、自身の制作に活版印刷を用いています。文字とクラシック音楽が好きだという木村さんは温故知新をテーマに『RE CLASSIC』と題し、インクをのせずに活版を空押しし、圧のかかった紙の凹凸に光で文字を透かし上げるとうスタイルの作品を制作しました。「活版印刷という古典的な手法で、古典音楽のタイトルを印字している、ということです」とさらに言う。

各々が古典的といわれる手作業での制作で得たものはコンピュータのありがたさだったという。「今までパソコンで制作していた、何も考えずに文字を縮小したり拡大したりしていました。活字は一度組んでし



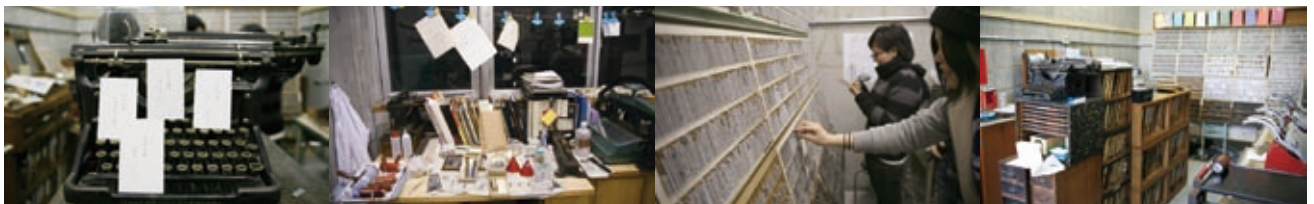
左から森みどり 佐藤由貴 木村香南 牧野友里子(デザイン学科ヴィジュアルデザインコース4年生)。世界一有名な書体「Helvetica」のドキュメンタリー映画を学内で上映した際には学内広報用に、ポスターや冊子を作成した。

まうとポイント数を自由に変えられません。また、文字間、行間がインテルなどの道具の長さによって制限されたりします。一字でも活字が足りなくなったら刷れないし、根気がつきます。」と、佐藤さん。さらに他のメンバーも続けます。「活字を扱うようになってから普段のコンピュータでの制作で文字を使うのが上手くなった気がします。適当に文字を扱わなくなりました。」また、「女子美生はアート気質というか、制作においてヴィジュアル面は凄く凝って時間をかけて作るのに文字はものの数分でポンッと感覚で置いてしまいがちだと思う。」と自らを分析します。だからこそ自分達の卒業制作が活版印刷や書体の世界に興味を持つ入り口になってくれたらと語る彼女達。夢は、「将来また皆で集まって活版工房を持つこと」だといいます。

欧文タイポグラフィ研究会は主要メンバーが卒業しますが、後に続く学生が10名ほど在籍します。先輩達のメッセージが込められた工房をこれからは彼女達が守っていきます。そして一見難しそうだったり、退屈そうで遠回りに見えるものでも知識や教養としていろいろ学べる場に身を置くということは学生のうちにしかできない貴重な時間なのです。



①牧野友里子『SWEET TYPES』②木村香南『RE CLASSIC』③佐藤由貴『COLOR PRINTING BOOK』イギリスの伝統色の色見本帳。タイトル、説明部分をイギリスの書体を使用し活版で刷る。色見本部分は自分でCMYKを調節しながらシルクスクリーンで刷っている。コンピュータを使うと一瞬で終わる作業だが全てが手作業で行われている。④森みどり『ポラロイド・ラブソング』書籍の中のタイトルと、カバータイトルを樹脂凸版を用いて活版印刷で刷っている。印刷の風合いに日記のような私さがある。



「短大の活版工房の設備や規模が憧れです、学部の工房はようやく機能しはじめたばかり。欧文書体はたくさん揃っているんで、短大の子も興味あれば訪ねに来てほしいし、自分達も短大に見学に行きたい(笑)」デザイン学科の活版印刷の工房は、学生の日常の勉学の中で制作と研究のために使用の際に役立つようにという様々な方からのご厚意により成り立っている。以前からあったアナ印刷機(ハンドプレス)と若干の活字に加えて、斉藤正文堂から30種を超える欧文活字を譲り受け、岩田活字鋳造所の整理の際には和文活字を特別に購入することができ、(株)精興社より校正機、活字ケースなどの寄付を受けた。また、この輸送の際には印刷博物館の学芸員の方や、凸版印刷(株)関連の運送会社のご厚意を受け無料で搬送していただく。そして昨年、松栄印刷からは和文活字各種、スタレケースの総計84枚分の寄贈を受けた。

2007年度クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート海外スプリングスクール報告 オーストラリアで学ぶ

本学の学術交流協定大学である豪クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート（以下QCA）において、2008年1月25日から2月25日までの間海外スプリング・スクールが開催されました。このスクールは、本学とQCAが共同で企画した美術・デザイン実技授業を中心に構成されており、今回初めて実施されました。参加した10名（芸術学部6名、短期大学部4名）はオリエンテーション、事前指導、英語研修を約2ヶ月にわたって受講し、出発しました。

主なプログラム

第1週目 グループ交流／自己紹介プロジェクト+ジュエリープロジェクト

グループ交流／自己紹介プロジェクトでは、まず、2人一組となって互いをドローイングしました。その後交換し、予め日本から持ってきた自分の家族の写真や家族の歴史が込められたモノを自分なりに加工して描き込んでいきました。紙の大きさ、枚数は自由に設定でき、個性溢れる自己紹介作品となりました。

ジュエリープロジェクトでは、素材として銀、銅、アルミが渡され、オーストラリア滞在の印象や自分が好きなモノ・形をデザインし、ペンダントを2~3個制作しました。

第2週目 グラスハウス山プロジェクト+アボリジニー・アートプロジェクト+版画

週の初めは郊外のグラスハウス山での屋外スケッチからスタート。あいにくの雨の中、自然現象で奇形となった山々や周辺の風景をスケッチブックに収めました。キャンパスに戻った後、山の印象や山が持つエネルギー感を自由な形に切り取った大判用紙に表現しました。アボリジニー・アートプロジェクトでは、オーストラリア先住民である講師陣から先住民族の歴史や文化的側面についてのレクチャーを受けた後、「メ

モリー・ボックス」を制作しました。これは、アボリジニー独特のアートで、小さな箱の中に家族の歴史や風習を表す写真やモノを配置して作品として完成させるものです。版画では、モノ・プリントとインタリオ技法で2~3の版を作り、多くの色を試しながら刷り終えました。

第3週目 植物ドローイング+リサイクルアートプロジェクト

不安定な天候が続いたため、予定していた植物園プロジェクトは翌週へ延期されました。その代わりに、オーストラリアの海や山で採取された貴重な植物が講師から貸し出され、各自、そこから選んだ物を自由にドローイングしました。なんといっても興味深い経験だったのは、リサイクルアートプロジェクト。ガラクタとしか思えないような物を売る店に出かけ、20ドル以内で材料を購入し、これらを使って立体作品を制作します。本学学生のみならず、QCAの学生や卒業生アーティスト、ブリスベンで活躍する邦人アーティストも参加する大規模なものとなり、交流も深められました。

第4週目 植物園プロジェクト+修了制作

植物園プロジェクトでは垂熱帯に生息する異形の植物の息吹を間近で観察します。それらを写真に収め、眼に心に刻み、キャンパスに戻ってドローイングを完成させました。最後の課題は「修了制作」。その完成度や過去の制作作品をどのように展示するかも評価されます。展示会場にはQCAの講師陣、スタッフ、学生など多くの人々が訪れました。学生によるプレゼンテーション、講師講評の後、QCA学部長から修了証書が全員に手渡されました。ランチパーティーも催されて、お世話になった方々との別れを惜しみつつ、スクールは終了を迎えました。



クラブハウス山プロジェクト



版画



(学生感想文)

芸術学部絵画学科洋画専攻2年 小泉 千織

4週間の月日はまるで夢のようでした。あっという間に過ぎ去って、思い返すと楽しかったことばかりが輝いています。自分の世界観は確実に広がりました。自分一人でバスや電車を乗り継ぎ登校し、英語で会話し、必要なものを購入する。日本では出来て当たり前なことが、目の前に大きなハードルとして立はだかっていた。その一つ一つを超えていく地道な努力が私を大きくしたのだと思います。心に焼きつく、とても充実した日々でした。

短期大学部造形学科デザインコース1年 結城 美穂

一番印象的だったのが寮生活。英語がしゃべれることで全世界のヒトと交流できることを見て、経験して、今まで日本で満足していた私は自分ですごくちっぽけに思えました。また、授業を通してコンセプトの大切さを痛感しました。毎日が新しいこと、刺激でいっぱいでした。今回オーストラリアで生活して世界を身近に感じ、世界に進出したいと強く思いました。この経験を必ず今後の人生に生かしていきたいです。

NEWS ● 1 東京マラソンに参加しました

東京マラソンに女子美生が挑戦しました。昨年開講した「マラソンを走る」という授業の一環です。「美大生がマラソン?」という不安をよそに、30名の履修登録がありました。この授業ではマラソンを走る楽しさと、マラソンを通じて女性としての健康的な身体管理能力を身に付け、さらに日本の女子マラソンの普及活動に貢献しようという試みがあります。

授業の開始時は靴の選び方・走り方から始め、10分程度のジョギングしかできなかった学生達も夏の合宿では30kmを生まれて始めて走り、東京マラソン当日には13名中10名がフルマラソンを、4名が10kmを完走しました。「作品もマラソンも持久力」、「4年間で最大の思い出」と各々が感想を述べていました。



International ● 2 広州美術学院からの留学生来校

2007年11月5日(月)から同12月14日(金)までの間、本学の学術交流協定大学である広州美術学院(中国)から協定外国人留学生として2名が来日し、林徳全さんは大学院立休芸術研究領域、黄麗絲さんは芸術学部絵画学科日本画専攻でそれぞれ実技・演習科

林徳全さんの感想文

日本は美しく、人々が優しい国です。美術館に行けば素晴らしい作品に触れることができ、充実した時間を過ごせます。先生方や友人たちはいつも私をサポートしてくれました。

留学期間を終え、一番強く感じているのは、日本は外国の文化を取り入れることで独自の文化を創造し続けているという点です。例えば、紙作りの技法は中国から伝えられましたが、日本はその技法をさらに発展させた紙の芸術を生み出しています。また、日本で訪れた美術館で私はいつも西洋の影響を感じました。これは世界中の国々がお互いに影響しあって発展することの重要性を示していると思います。

生活面では出掛ける時は必ず混雑したバスや電車に乗らなくてはならず、全くわからない日本語に身振り手振りで気持ちを伝えたりと苦労しました。でもすぐに簡単な日本語を話せるようになり、友人たちが私にたくさんのお話を教えてくれました。中国には「人生の中で親友を持つことは簡単なことではない」という有名な言葉があります。友人たちに心から感謝しています。今回の留学プログラムでは中国では勉強できないことをたくさん学ぶことができました。日本で過ごした日々は今後私の人生においていい影響を与えてくれるでしょう。

目の授業に参加しました。林さんは、紙・金属・木彫のコースで積極的に知識や技法の習得に取り組み、いくつかの作品を完成させました。黄さんは日本画専攻の2年次の授業に参加し、同専攻内の学生たちとともに古典模写や動物を題材とした絵画制作をし

黄麗絲さんの感想文

日本での留学生活は、いろんなことが体験でき勉強になった2ヶ月間でした。

第1週目は古典の山水を模写しました。私は中国画学科で壁画を専攻していますが、山水画は描いたことがなく、しかも日本と中国では模写技法が違うので苦労しました。出来上がった私の作品は他の学生のものとは違っていました。第2週目と第3週目は日本画制作の準備作業と動物デッサンをしました。いくつか動物園については写生をし、同時に美術館も巡り様々な展示を見ました。日本にはいい展示会が多く、学生にとって有利な環境だと思います。日本画と中国画は大体同じですが、紙の作り方や素材の作り方、描き方に違いがあります。例えば、日本画は溶剤の量が中国画と比べて濃く、絵を描く紙の厚さも日本画の方が厚いです。また中国画と違って日本画は絵の具を混ぜて描くので、最初は慣れず、あまり良い作品ができませんでした。しかし、先生と友達の手伝いのおかげで段々良くなりました。

来日前は日本語で上手に交流できるか不安でしたが友だちもでき、皆さんが親切でした。東京の各所を案内してくれたり、日本独特の文化を感じさせてくれたりと、生活の面でも勉強の面でもサポートしてくれてとても感謝しています。

ました。2006年度に広州美術学院に短期留学した本学学生を中心とした学生グループが林さんと黄さんの生活をサポートし、それぞれの所属先での歓送迎会などの学生間交流や美術館・博物館巡りなど日本での留学生生活を十分に満喫していました。



林 徳全さん



黄 麗絲さん

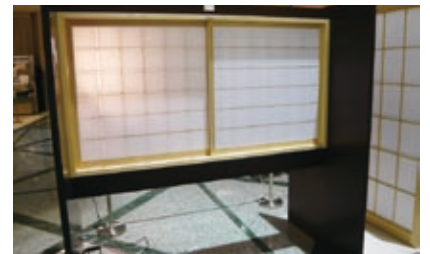
Topics ● 1 えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト

本プロジェクトは、産学公連携として有志学生が多摩美術大学・東京造形大学とともに参加し、江戸川区在住の伝統工芸士のコラボレーションによって製品開発、市場開拓やPR支援等を行うものです。伝統工芸士のもつ「わざ」に美大生の創造性をプラスすることで、既存商品との差別化を図り、新たな伝統工芸品を生み出しています。

平成19年度、本学からは21作品が試作品化され、東京デザイナーズウィーク、江戸川区区展や東京インターナショナルギフト・ショー等に出品されました。また、デザイン学科2年佐藤奈津子さんの作品「ヒカリノコウシ」が区内展来場者投票数1位

のえどがわ賞(金賞)と3大学教員賞のW受賞となりましたが、これはプロジェクト発足以来初のことです。

また、プロジェクトから生まれた「edgawa³」(えどがわきゅーぶ)というブランドの確立・普及を行うために、ブランド育成チーム(ブランド運営班/イベントプロデュース班/Web・カタログ班/パッケージ班)が活動しており、本学の学生も多く参加しています。1年毎の商品提案に対して、各班の諸活動がプラスされることで、「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」のもつブランド力が確実に強化されてきており、より多くの方に認識されるようきっかけにもなっています。



NEWS ● 2 熊本市現代美術館がJAFRAアワード(総務大臣賞)を受賞

本学芸術学部芸術学科教授 南島宏先生が今年3月まで館長を務められていた熊本市現代美術館がJAFRAアワード(総務大臣賞)を受賞しました。「生人形」「いけばな」など地域文化に着目した企画展で熊本の文化力を発信する「まちなか美術館」と

して、街の賑わいづくりに貢献していると評価されての受賞です。JAFRAアワードとは、全国の地方公共団体から応募・推薦のあった施設を対象に、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設を顕彰し、

全国に広く紹介することによって、公立文化施設の更なる活性化を図り、美しく心豊かなふるさとづくりの推進に寄与することを目的として、財団法人地域創造が実施しているものです。

<http://www.camk.or.jp/index.html>

Topics ● ② 学生のボランティア・社会貢献及び学外展覧会支援

近年、学生の教育の場として従来のキャンパス内での講義だけでなく、キャンパス外での学修活動を積極的に進め、学生の「社会人基礎力」を高め育成する一助とするプログラムが進行しています。本学でも平成19年度より、学生が主体となり、ボランティア活動や社会貢献活動、及び学外での作品発表、展覧会を行う場合、その目的及

2007年度申請「サマーキャンプ」参加者の声

南信濃の過疎化が進む木沢地区。木沢地区活性化推進協議会が企画する廃校になった小学校で行う町おこしのイベントに参加しました。木沢の保育園児達を対象におこなったポスターペインティングは美大生ならではのアイデアを出し合ったワークショップです。4泊5日のサマーキャンプとして町のお祭りなどにも参加し地域の方々との交流を深めることもできました。参加して感じたこと

参加者氏名

齊藤 慶子、野島 三紗子、森 葉子（芸術学部 絵画学科 洋画専攻3年）岡田 蘭子、木ノ下 奈緒美（立体アート学科3年）白井 洋子（デザイン学科3年）
赤木 恵里（大学院美術研究科修士課程デザイン専攻ヒーリング造形）

び期待される成果に応じて大学が活動にかかる費用の一部について支援を行う制度が開始されました。

対象となるものは、原則として本学学生による個人以外のグループ単位（クラブ・同好会含む）の事業であり、その活動の推進によって社会に貢献または教育研究上の効果があると認められるものとなります。

は、自分の地元も地方の田舎なのに、木沢の方々に比べて地元をどうにか盛り上げたいという気持ちが薄いということ。今回はたまたま木沢の町の企画の中で参加することになったのですが、今後は自分達の故郷を活性化するためのイベントを、アートを通して自分達の手で企画してみたいです。こういった社会に関わる活動を大学が支援してくれることは大きな励みになります。

支援の内容は、活動全体に関わる必要経費のうち、最高10万円の範囲内で支援しますが、金額は活動内容と活動にかかる全体経費を考慮した上で決定しています。平成19年度は初年度にもかかわらず大学で19件、短大で2件の応募があり、そのうち大学で12件、短大で2件が採択されました。（問合せ先：学生支援センター 042-778-6614）



NEWS ● ③ 親しみと安らぎを感じる地下鉄ホーム対向壁のデザイン完成

本学では1992年から、さわやかな気分になって心が落ち着く効果を目的としたヒーリング・アートを病院や介護福祉施設に設置する活動を、教育研究の一環として続けてきました。そのノウハウを活かし、地下鉄ホームにおける安らぎ、癒しの空間への演出として、東京メトロ丸ノ内線東京駅ホームに設置するアートウォールのデザインを行いました。

「地下鉄を待つあいだ、目の前に明るく楽しい世界が広がっていたら」

そんな発想からこのデザインは始まりました。テーマは「自由に走る丸ノ内線」。

東京駅の特徴は、東京メトロの中で首都「東京」という名前を持つ唯一の駅であり、50年以上の「歴史」と、再開発によるニュームーブメントの中心でもある「トレンド」、そして特筆すべきは、皇居の正面に位置し、四季を通して豊かな「自然」があることで、この「歴史」「トレンド」「自然」のキーワードを融合させることをコンセプトとしています。そのデザインは、豊かな自然の象徴である鳥を案内役に、さまざまな視点から、駅周辺景色のイメージを具象と抽象をおりませ、記号化した世界として、開いたドアの向こう側に描いています。

アートウォールは平成20年5月上旬完成予定ですが、3月下旬から少しずつ見ることができるようになります。



デザイン・イラストレーション：
芸術学部メディアアート学科 講師 中嶋 ハルコ、山司 千津子

NEWS ● ④ 座間市立図書館と本学図書館との相互協力に関する協定締結

本学図書館と座間市立図書館は、このたび相互協力協定を締結いたしました。

締結式は、平成19年12月19日(水)座間市役所内の教育委員会室で、座間市側金子楨之輔教育長、小針文江座間市立図書館長、本学より小倉文子芸術学部長、稲木吉一図書館長が出席されました。

現在、生涯学習の一環として相模原市と座間市が連携し開設する「市民大学」や、本学主催の「女子美アート・セミナー」に参加される地域住民の方々が数多く来館され

ます。その際に本学図書館を利用した座間市在住の方から、「普段でも女子美術大学の図書館が利用したい」との要望が寄せられたことをきっかけに、平成19年7月末より両図書館で検討を重ねてきたものです。

今回の協定では、座間市在住・在勤の満20歳以上の方を対象に、登録頂くことで本学図書館の閲覧・館外貸出等のサービスを提供できるようになりました。（登録は有料：1000円）また本学の利用者が登録の上、座間市立図書館を利用することが可能

であり、その際には本学学生、教職員は座間市立図書館と、その分館を利用することができます。

女子美術大学図書館では、美術専門図書館として所蔵する図書資料による閲覧・貸出等の利用者サービスを主軸として地域に貢献します。今後各種事業の企画を行い、さらなる地域連携強化や協働を図っていきたいと考えております。

（相模原図書館情報センター）

Essay ● 「パリの交差点」 新津 亜土華さん(第8回パリ賞受賞者)

パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を研究員として派遣する100周年記念大村文子基金による「女子美パリ賞」。題8回受賞者で1年間パリに滞在していた新津亜土華さんが現地で感じたことを寄稿してくださいました。

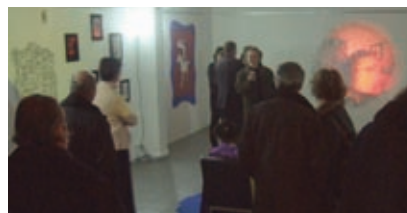
国際芸術都市に集まる表現者たちとの数々の交流の中でなにより感動したことは、日本の文化にみな関心と尊敬を寄せこんな日本が愛されているのか、ということでした。彼らの国を地図やウェブで確認しながら、世界がどのように成り立ちそこになどどのような表現があるのか、パリという時空間を共有しながら『異文化を体験する』日々は、同時に私が自国の文化に自信を持って進むべきだという事を強く感じた貴重な体験です。

コミュニケーションについて制作してきた私にとって『自作品の異文化における反応を得る事』も重要な課題でした。異なる国から来た人々の中に自分に似た部分を見つけ、ストレートに自分の感じることを表す異なるコミュニケーションにおいて自分に内在する感覚に気づき、私と同じようにパリに滞在する日本の友人たちと外国の生活について対話から得た問い「私＝あなたとは誰か？」から、新作「Piaffant!」を制作しました。これはパリで録音し、またイ

ンターネットを使って集めた私を知る人の声によって、カメラでとらえた観客の映像がリアルタイムに変化するインスタレーションです。パリでの滞在と人々との出会いがなければ完成しなかった作品で、コミュニケーションのチャンネルを開いておく一方で、自分を見失わずに表現としてまとめ、伝え、反応を得る、という私のインタラクティブティの新たな方向性となりました。

また、私は表現者にとって人と人の直接の出会いが持つ重要性が、電子ネットワーク時代の今だからこそより増してきていると感じ『国際的アーティストとしての人的ネットワークの構築』が少しでもできれば、と考えていました。最初は方向感覚さえ頭に入っていなかったパリの街ですが、ジャンルを問わず足を運び続けました。アトリエに近いマレ地区やサンジェルマン地区では毎日のようにオープニングが行われており、次第に行けば必ず再会できるパリ在住のアート関係者やアーティスト友達ができました。多くの人が美術を日常の大切な体験と捉えている事に感動しながら、彼らとのネットワークを築けたことで多いに勇気を得ました。

今帰国を前にしてアートイベントへの参加の準備に追われています。2008年は日



シテデザールでの個展のオープニングの様子

仏文化交流150周年にあたり、日本人現代作家の表現と、日本文化に啓発された海外作家の作品を展示するイベントで、私はビデオと写真の展示を構想中です。また同時期にマレ地区のワインバーのスペースで、描きためたドローイングを展示できることになり、友人たちと訪れた思い出の場所で展示ができる機会を本当に嬉しく感じています。

振り返ってみると出発前に立てた指針はすべて複雑に絡まりながらの素晴らしい体験となりました。今後も世界とのコネクションを深めるべく活動を続けて行こうと思います。最後に貴重な機会を与えて下さった女子美関係者の皆様、応援して下さいました方々に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました！

新津 亜土華

1998年 女子美術大学芸術学部芸術学科卒業
2007年 女子美パリ賞受賞、現在パリ国際芸術都市(シテデザール)滞在中
<http://come.to/adoka>

NEWS ● 100周年記念大村文子基金 平成19年度 女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞(付属高校・中学校生対象)は本学付属生徒の美術活動を奨励する賞です。右記の通り、本年度の「付属学校生」の受賞者が決定しました。

◇100周年記念大村文子基金募集について

同窓生・大学院在学生在を対象に制作・研究活動の奨励等を目的とした「女子美パリ賞」「女子美制作・研究奨励賞」を毎年募集しています。今年度の募集受付期間は、平成20

高校生受賞者

シェリー ゼイン キム

女子美術大学付属高等学校 3年

中学生受賞者

木村 光里

女子美術大学付属中学校 3年

URL:<http://www.joshibi.ac.jp/society/foundation/>
[お問い合わせ先]
教育学生支援センター TEL: 03-5340-4507
E-mail: es-ecp-j@joshibi.ac.jp

NEWS ● 6 柚木 沙弥郎 一わきあがる色と形

長く本学にて指導にあたられ、1987年から91年まで学長を務められた、本学名誉教授柚木沙弥郎先生の展覧会が、岡山県立美術館で開催されます。

先生の型染め作品が一同に会するほか、版画や絵本挿絵・立体造形など、近年ますます広がりを見せる「柚木ワールド」の全貌が紹介されます。

◎特別展「柚木沙弥郎一わきあがる色と形」

主催・会場：岡山県立美術館

(岡山市天神町8-48 電話086-225-4800)

会 期：2008年5月27日(火)～6月29日(日) 月曜日休館

開 館 時 間：9:00～17:00(金曜日-19:00)

[入館は閉館30分前まで]

柚木先生によるレクチャー:6月8日(日)14時から同館ホールにて

同館ホームページ

<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html>



柚木 沙弥郎 「早春」 1996

Topics ● 3 訃報 日本画家 片岡球子氏 逝去

「片岡球子先生を偲ぶ」 学長 佐野 めい

2008年1月16日、日本画家の片岡球子先生が急性心不全のため103歳で亡くなりました。

先生は女子美術学校(現在の女子美術大学)日本画科高等科卒業、小学校教諭の傍ら絵を描き続け、その後女子美術大学芸術学部美術科日本画科教授、愛知県立芸術大学教授を務められました。

82年、日本芸術院会員、86年に文化功勞者、89年に文化勲章を受章。本学名誉教授。代表作は、足利尊氏や葛飾北斎など男性の肖像を題材にした「面構(つらがまえ)」シリーズや「富士山」などがあります。ここに深く哀悼の意を表し、謹んでご報告申し上げます。

「人体デッサンは、先ず関節を描くことがとても大切です。」

片岡先生は、教室に入ると真直に学生の裸婦のデッサンの前に立たれ、いきなり木炭で膝の関節に、ぐるぐるっと円いとか楕円の形を描かれました。「モデル」をじつと観察し、解剖学まで思い浮かべながら、恐る恐る関節を描いていた私は、この瞬間、

云いようのない戸惑いを感じて茫然自失でした。

日本画科の教室に伺ったときに、始めて接した片岡先生の授業でした。

片岡先生は、札幌のご出身ですので、札幌や小樽や函館に住んでいた私の親戚や知り合いは、以前、片岡先生にお世話になりましたと云っておりました。先生が女子美の日本画科に専任講師としておいでになった年、私も洋画の助手になりました。先生にお会いすると、「これAちゃんの作った帽子よ」「Bさんはどうしているの」などと、「北海道知人往来」の話を致しました。

ある時、片岡先生から、赤、黄、青、緑などルランの大きな顔料が数種類届きました。

先生が研修でフランスにいらしたとき、制作にお使いになったものでしょうか。コバルトブルーの鮮烈な色彩は、パリの匂いがするようでした。その傍らに小さな箱が一つ「シャネルの口紅」が一本置かれていました。

片岡先生の個展が開催されるたびに「富士山」「面構」「ポーズ」など、奔放で大胆な筆力と活力に溢れた作品を沢山拝見することが出来ました。ある会場で先生にお目にかかった折、お互いに何を話したかは覚えていませんが、突然、先生がすごい勢いで抱きついてこられました。その時の先生の赤い口紅が、私の黄色いスーツの左肩にべったりとつきまじりました。モンロー?のような口唇の形でした。スーツはそのままにして筆筒に入れてしまいました。

片岡先生の訃報をお聞きして、ふと黄色いスーツを思い出し、引き出しを開けて見ました。歳月が経って、口紅の染料は淡いピンク色に変わり霞んでいました。

「片岡球子先生
新しい国で、また富士山をお描きになっていらっしゃるんですか。女子美一同そのお姿を思い出しております。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。」



片岡 球子 「富士」 2000年
38.0cm×45.5cm
紙本着色
収蔵：葦崎大村美術館

J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告

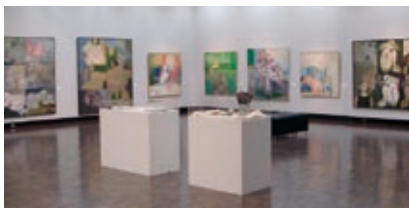
＜JOSHIBI-GEORGIAN An Exchange Exhibition of Works on Paper 女子美術大学・ジョージアン大学 国際交流展＞
展覧会の特別企画として、1月18日の夕方、JAMロビーにて小本章氏（大学院・版画研究領域特別講師）のパフォーマンスが行われました。風景や物体を前にして設置されたカンヴァス上に流木、果物などの物体を置き、景色とカンヴァス上の物体を色でつなぐように描いていく小本章のパフォーマンスは、まるで現実の景色と絵画世界を融合させていくようで、学生もその不思議な世界にすっかり引き込まれてしまった様子でした。（2008年1月11日～2月25日）



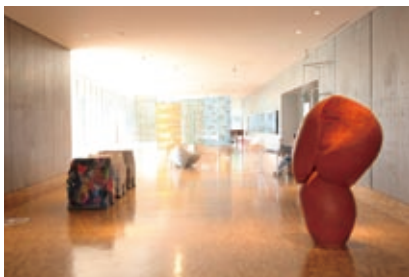
＜平成19年度 女子美術大学・女子美術大学短期大学部 退職教員記念展 柳千代子＞

2007年11～12月に女子美ガレリアニケで開催した柳千代子先生の展覧会が、JAMに巡回しました。アトリエの空気を伝えるために、JAMでは作品とあわせて、柳先生が制作で使用している筆やパレットなどの道具も紹介しました。

（2008年1月11日～2月25日）

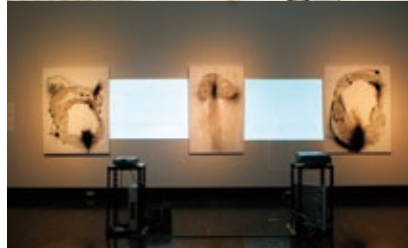


＜平成19年度 女子美術大学大学院 修了制作作品展＞



平成20年3月に大学院を修了する学生の修了制作を約50点展示しました。

（3月9日～3月20日）



JAM展覧会予告

＜2008年度女子美術大学同窓会企画展 PHOTO+GRAPH展—光の描画—＞

女子美術大学を卒業後、写真や映像などの光を使った描画アート分野で活躍するクリエイターを紹介する同窓会企画の展覧会です。イベントとして昨年行われたワークショップでの制作作品や、2000年代版ガーリーフォトなども展示します。

（4月5日～5月6日 ※最終日火は特別開館）

＜北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒 脇阪克二テキスタイルデザインの世界—女子美コレクションを中心に—＞

フィンランドのマリメッコ、アメリカのラーセン、日本のワコール（インテリアファブリック）で活躍したデザイナー・脇阪克二のデザインした布地や、デザイン原画を展示。テキスタイルデザインおよび生活の場に明るさを与えるプリント布の魅力を紹介いたします。

（5月17日～6月29日 ※入館料 300円）

＜芸術学科プロデュース展（仮）＞

芸術学科学生の企画による当館コレクション展（仮）。

（7月11日～7月27日）

女子美ガレリア ニケ

昨年10月に開館した「女子美ガレリアニケ」では、若手女性作家を中心に、女性をテーマとした作家や作品等を取りあげ、実験的な企画を行っていきます。教員のプロデュースによる企画、公募企画（大学・短大・付属中高の教員、大学・短大学生、同窓会から公募）などを中心に、展覧会やパフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催します。

女子美ガレリアニケ展覧会報告

・イチエリ ICHIERI 市川絵里子個展（企画 短期大学部造形学科デザインコース教授 伊勢克也）

短大造形学科デザインコース助手の市川絵里子の作品展。（1月10日～1月25日）

・ソレカラ（企画 女子美術大学附属高等学校・中学校副校長 中谷直子）

1994年3月に附属高校を卒業した6人による展覧会。（1月29日～2月15日）



・水尻自子のアニメマタニティ（企画 短期大学部造形学科デザインコース教授 伊藤ガビン）

2007年3月に芸術学部デザイン学科を卒業した水尻自子の作品展。

（2月19日～3月9日 ※最終日火は特別開館）



・手技の美（企画 短期大学部造形学科デザインコース教授 安田律子）

短大陶芸・メタルデザイン教員による陶芸・金工・漆芸の各分野の作品展。

（3月11日～28日）

Message ● 2008年度 新任専任教員紹介



北澤 憲昭
Kitazawa noriaki

大学院 美術研究科芸術文化専攻 美術史教授

1951年東京生まれ。1978年から美術批評の執筆を始め今日に至る。著書に『眼の神殿——「美術」受容ノート』（美術出版社）、『岸田劉生と大正アヴァンギャルド』（岩波書店）、『境界の美術史』（ブリュッケ）、『アヴァンギャルド以後の工芸』（美学出版）などがある。美術評論家連盟、美術史学会、表象文化論学会に所属。

日本社会における近現代の美術を歴史学の観点から研究しています。作品や作家についてはもちろんのこと、美術をめぐる言説や制度にも関心を抱いています。また、現代の美術については美術批評の筆を執ることで、実践的なかわりを持ち続けてきました。こうした経験と関心に基づいて、共に考える授業を組み立ててゆきたいと思っています。



岸野 香
kishino kaori

芸術学部 絵画学科日本画専攻 准教授

栃木県生まれ
1989 女子美術大学芸術学部絵画科日本画専攻卒業
1992 東京芸術大学大学院美術研究科保存修復技術日本画修士
1996 東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学助手
1997 春の院展 奨励賞（'99,'00,'01,'04,'05,'06,'07）
再興日本美術院展 奨励賞（'98,'99,'00,'01,'02,'04,'05,'06,'07）
第3回足立美術館賞
1998 春の院展 春季展賞（'02）
2004 文星芸術大学准教授
日本美術院特待

日本画材料はとても魅力的です。岩絵具・膠・和紙などの伝統的素材を用いて、現代日本画はとても幅広い表現をすることが可能です。

制作を通して、自身の内にあるものと向き合い、探し、実感しながら可能性を大きく広げて欲しいと思います。

女子美の自由な環境で、様々な出会いに柔軟に向き合いながら、改めて皆さんと一緒に学んでいくことで、私自身の作品制作や研究にも活かしていきたいと楽しみにしています。



二宮 とみ
ninomiya tomi

芸術学部 ファッション造形学科 准教授

東京生まれ
女子美術短期大学テキスタイルデザイン専攻修了
染色家、国画会準会員、日本テキスタイルデザイン協会
会員、桑沢デザイン非常勤講師
賞歴
石川県装飾事業協会理事賞、第71回国画会工芸部
新人賞、題75回国画会工芸部準会員
2006 The Biennale WTA Costa Rica Man +
Woman Creation入賞、2007 JFW JAPAN
Creation Textile Contest 入賞

ファッション造形学科で、染色を中心とする衣服の、素材制作を指導させていただきます。

私の仕事はサーフェスファブリックの制作と、素材によるコンセプトワークを研究しています。染色は温度、湿度によっても仕上がりが違ってしまふ、デリケートな仕事です。焦らない忍耐と、繰り返しの努力が必要です。簡単にいかないところに、染色の仕事の魅力がひそんでいるのです。そんな事を学生の皆さんに伝えられたらと思っています。

Message ● 退職教員からのメッセージ



加藤 修
芸術学部 基礎教養系 教授

縁あって私が女子美にご厄介になったのは、平成2年4月、相模原に芸術学部が移転した折でした。前の職場では、大勢の「おばさま」や「おばさま」と一緒になって遺跡調査の仕事をしていましたが、一転して、「若き女性」と仕事をすることになりました。そこで感じたことは、まぶしい限りのエネ

ルギーと生活を見据えていない不安定感でした。多くの学生は、「自分に対する自信」がほしいのだと折につけ感じてきました。そのため、どんなことでもあることを成し遂げたという「達成感」が必要だと思いました。私（教員）の役割は達成感を共有することだと目標を定め、楽しく悪戦苦闘しました。



柳 千代子
短期大学部 造形学科 美術コース 教授

学生生活4年、勤務生活41年、通算45年間女子美術大学でお世話になった。人生の大半である。41という数字は大変な数であるが、今振り返るとアツという間であった。学生と夢中になって歩んできた。ことに茅ヶ崎校舎では家族同様、寝食を共にするような関わり方であった。学生は生身の教師で、

絵描きの背中を常に観察していた。昔は大学生活に「ゆとり」があったが、今は、特に短大においては、クラブ活動もままならぬ時代になってしまった。学生生活で最も大切なことは生涯の友と師に巡りあえることだ。どうかいつまでも女子美らしい“女子美”であって欲しい。

Message ● 3 新入生のみなさんへ



学校法人女子美術大学
理事長 大村 智

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

本学は、日本で最初の女性のための美術学校として明治33（1900）年に、横井玉子、佐藤志津らの先進的な思想により、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を建学の精神として創立されました。この百有余年に渡り約6万1千人の卒業生を輩出し日本の芸術文化の発展に寄与してまいりました。

なかでも文化勲章受章者の日本画家片岡球子先生及び皮革工芸家大久保婦久子先生、文化功労者の洋画家三岸節子先生をはじめ、現在も活躍中の文化功労者の日本画家郷倉和子先生、井上靖文化賞受賞者の洋画家嶋田しづ先生、紫綬褒章受章者の彫刻家多田美波先生、そして、損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞者の洋画家本学学長佐野ぬい先生など、枚挙にいとまがありません。こうした業績は、個人の恵まれた個性と弛まぬ研鑽の賜ではありますが、多くの卒業生がその多感な青春期に、それぞれの成長の芽を育む場を「女子美」に得たという共通の思いを抱いているということも疑いのないことだと思われます。

本学において皆様は、長い間蓄積された文化的価値及び体系的学問や方法論を効率的に学ぶことができるとともに「生き抜く力」を身に付けられ、更に、情報化社会にあって様々な情報を正しく取捨選択できる能力と合わせて「優れた感性」を身につけていただきたいと思います。そのために、専門的知識や技術の習得の他に、自由な時間、自主的な生活から多くの先生、先輩、友人との交友の中で、不断の人格の向上を図っていただきたく思います。逞しい精神力をもって様々なことに挑戦し、知的興奮と刺激に満ちた学園生活をおくり、そこから「個」を養い、美術の新しい担い手となられることを期待いたします。



大学院美術研究科長
橋本 信
(はしもと まこと)



芸術学部長
小倉 文子
(おぐら ふみこ)



短期大学部長
木下 道子
(きのした みちこ)



学長 佐野 ぬい

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。春四月、皆さんを女子美の学生として迎えることができまして、大変嬉しいです。キャンパスを往き交う貴方達は、春の風のように爽やかです。

女子美術大学は、今年で創立108年になりました。女子大としては、最も長い歴史を誇っています。

建学の精神と目標は三つあります。第一は「美術による女性の自立」第二は「女性の社会的地位の向上」そして三つ目は「専門の技術家、美術教師の養成」であります。この第一の「美術による女性の自立」ですが、すでに女子美は、優れた美術家、デザイナー、教育者などを沢山社会に送り出しています。創立の理念を生かして、21世紀の新しい芸術の世界に挑戦しています。

本学の諸先生方は、貴方たち学生一人ひとりの資質と特性を伸ばします。目標に向かっていく勇氣と自信をつけて下さるでしょう。

私も、女子美の卒業生です。女子美は、他の女子大と違って、芸術という一つの目的に向かって、心が揃っている大学です。これが女子美の特徴です。良さです。

大学生活では、優れた作品を創ることが大切ですが、在学中に、いい友、生涯の友をつくって下さい。何でも話せる、どんなことでも相談できる「終生の佳き友」となる友人を見つけて下さい。

Topics ● 4 公募展受賞者紹介

「世界ベンチ・イス創作コンテスト」 準グランプリ

国井 直枝 (短期大学部 造形学科 デザインコース空間・インターフェイス系2年)

「第30回 東京ビデオフェスティバル」 入賞 「夕張国際学生映画祭 2008」

学生ショートフィルムアワード・グランプリ受賞

川嶋 千尋 (大学院美術研究科 修士課程デザイン専攻 研究領域メディアアート造形1年)

青木繁記念大賞公募展

【入選】

安 美子 (大学院美術研究科 博士後期課程美術専攻 美術研究領域 洋画2年)

柳瀬 あかね (大学院美術研究科 修士課程美術専攻 洋画領域2年)

福田 千穂 (大学院美術研究科 修士課程美術専攻 洋画領域1年)

松沢 真紀 (大学院美術研究科 修士課程美術専攻 洋画領域1年)

Series ● シリーズ 女子美探訪⑨ 世の中の流れに逆らう

卒業生で写真家の迫川尚子さんの撮る女子美のシリーズ第9回(最終回)です。写真とエッセイをご紹介します。

私は写真家ですが、一方で飲食店の経営者でもあります。その二つが私の中でどうつながっているのか、自分でも正直わかりません。ただ、確かに、店は私の生活の糧ですが、単純にそう言い切れない面もあるんです。店の経営も、私にとっては創造の一つなんです。

ベルクという店(ギャラリーも併設したビア&カフェ)を新宿駅ビルの片隅にオープンして、今年で18年目になります。あー、いつの間に?当時、この世にまだ姿形もなかったバイトスタッフが、ちゃっかり一緒に働いてますもん。

公私ともに私のパートナーである店長は、ベルクをよくバンドにたとえます。組織に属さず、かといってワンマンでもない、と。

例えば、若い女性向けのサウンドがほしいと思ったとしましょう。ジャンルは?曲調は?誰に作曲をまかす?と決めていくのが組織的な音作りですね。また、それを全て一人でやるのがワンマンです。

でも、この時ここでこの楽器を使ってこの人とセッションしたからこういう音になった、というのがバンド的な音作りです。

もちろん、商売を続けるには、組織的にいかざるを得ない面もあるのですが、ベルクはこの18年この場所でこの食材に出会いこのメンバーでやってきたからこういう店になったというところがあります。バンド的なんです。

ところが世の中、選択肢が組織かワンマンのどちらかしかない流れになっているよ



うな気がします。バンド的なものが排除されている。

確かにバンドって、世の中を管理しようとする立場からしたら扱いづらいでしょうね。予測不能性が高くて。

だからなのか、ベルクは館内で断トツの売り上げにもかかわらず、現在、ビルのオーナーから立ち退きを迫られています。表向きは、ビルのイメージにそぐわないという理由で。

営業継続を求める請願用紙を店に用意したところ、あっという間に5000名以上の署名が集まりました。バンド「ベルク」で、一番重要なメンバーは?もちろん、お客様です。普通、商売にさじつかえるのを恐れて「立ち退き」という言葉は隠すようですが、うちのお客様とともに作ってきた店。

公にすることにためらいはありませんでした。また、そんなマイナスイメージを払いのけるパワーをお客様から感じました。

女子美を撮り続けたこのシリーズ、今回が最後です。名残惜しいのですが、私は新宿で頑張っています。是非パワフルなベルクを覗きにいらっしやって下さいね。

そしてぜひ、機会がありましたら、美味しいビールやコーヒーで一息つきながら、壁に展示されている作品(月替わりで、私を含め様々な作家による)をご覧いただけたら嬉しいです。

ではまた!

迫川尚子(さこかわ なおこ) [写真家]
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業
「BEER & CAFE・BERG」副店長

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方は毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課までご連絡ください。

また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。

《広報入試課》 TEL. 042-778-6123

FAX. 042-778-6692

[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

お詫びと訂正

広報誌 NO.159 において下記の記事に誤りがあり、お詫びを申し上げますとともに、ご訂正願います。

11ページ「仲條正義先生特別授業」平松悠(誤)→平松悠(正)

16ページ「荏嶋大村美術館が閉館」

山梨県知事の横山正明氏(誤)→横内正明氏(正)

荏嶋市長の横山公明氏(誤)→横内公明氏(正)

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 企画部 広報入試課

制作・印刷 株式会社 日相印刷

監修 原田 松野

発行日 2008年4月1日